

# ぶどうの木

第 33 号 (2008年 3 月発行)

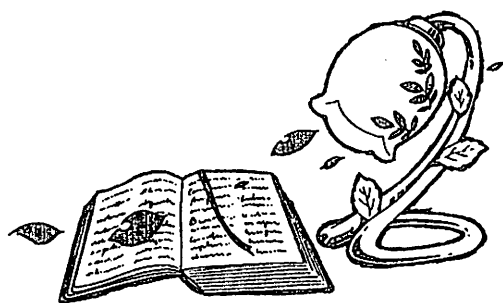


基督伝道隊

八幡前田教会  
福岡大濠公園教会  
戸畑教会

# 目次

巻頭言	榎本和義牧師	1
操叔母の思い出	広瀬フサエ	2
池田操姉を追悼して	広瀬和美	
祈りにこたえられて	平石ミサヲ	5
花に寄せて歌う賛美	榎本和義	7
アクシデント	廣田壽	13
夜道	首藤正	13
導きの御手	首藤正	15
受洗後の大試練	秦タネノ	16
重箱の隅	内田知代	23
気になる木	首藤正	27
いきさつ	尼田隆己	29
記念会	首藤正	30
スペイン旅行感想記	緒方とみ子	33
八幡前田教会年末感謝会	正野真宏	35
福岡大濠公園教会年表		40
編集後記		62



## 巻頭言

榎本和義 牧師

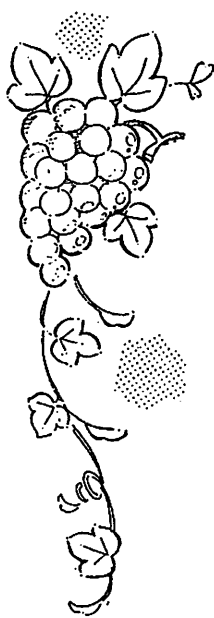
「わがたましいよ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ」。詩篇一〇三篇二節

人はまことに忘れやすいものです。歳を取ればとるほど、ますます忘れやすくなります。ある意味では、「忘れる」ことは幸いなことですが、忘れてはならないこともありす。その一つは神様の恵みです。神様が私達にどんなことをしてくださったか、それを忘れてはなりません。むしろ、そのことを心に留めて、絶えず新鮮に感動することが信仰生活の大切な原動力です。聖歌のなかにも「数えてみよ、主のめぐみ」という賛美があります。神様への信頼、御言への聴従が欠けて、不信仰に陥るとき、自分に与えられた主の恵みを思い返してじっくり味わうと、信仰がリフレッシュされ、また元気を与えられ、前進することが出来ます。

そのような意味で、あかし集「ぶどうの木」は主の恵みを記録して、私達の信仰を揺るがないものへと強化するもので

す。昨年一年を通して、主から受けた恵みの一端がここに集められました。時と共に、忘れられることでしょうか、こうして書き留めることによって、主の恵みを繰り返し感謝することが出来ます。

また、他の人の信仰体験を知るとき、同じ恵みに気づかないで過ごしている自分を知ります。これもまた感謝なことです。この「ぶどうの木」を通して、一人でも多くの方が、主の恵みを改めて感謝することが出来ればと、切に願っています。今回もまた多くの方々に寄稿していただき、嬉しい限りです。次号にはさらに多くの恵みのあかしが寄せられることを期待して、神様の祝福を祈りつつ、「ぶどうの実」をお届けします。



## 操叔母の思い出

広 瀬 フ サ エ (姉)  
広 瀬 和 美 (姪)

池田操(旧姓広瀬操)は、平成一九年三月二九日午前十時三五分、天国に召天いたしました。

当日の夜に前夜式、翌三十日に告別式を、八幡前田教会で行わせていただき、感謝申し上げます。

榎本和義先生、金生一郎先生、教会の皆様のお祈りに支えられて、叔母操は勇気を与えられて、喜んで生活を楽しみました。

叔母が天国に召天した日は暖かく、タンポポが咲き、モンシロ蝶が舞い、叔母に相応しい日だと思えました。

前夜式の時、和義先生が「旧牧師館」で操と共に生活した出来事をお話されました。「あの時はひしめき合った家庭で、窮屈だったでしょう」というお言葉でしたが、叔母からは一度も「窮屈」という言葉はなく、「楽しかった。嬉しかった」、この言葉を何度も話してくれたことを思い出します。

若い時の叔母の家族は、現在の帆柱山の下、高速道路の近くに住んでいましたが、昭和二八年の八幡の大水害で、家が

そのままの姿で流されました。このため、八幡東区高見町にある八幡製鉄所の社宅で、生活するようになりました。

その頃、榎本利三郎先生、百合子先生から、一緒に住んでお手伝いをしてくださいませか、と声掛けをいただきまして、「旧牧師館」での生活が始まりました。

早天祈祷会が始まる前に木炭や練炭で部屋を暖め、また家事を受け持ち、夜昼、お祈りの生活でした。子供さん達との楽しい時間も、喜びでした。

十八歳の時、心臓弁膜症と診断されましたが、若さのゆえの体力があつたのでしよう、牧師館での生活は続き、七年間お世話になりました。

誠さんが誕生した日は、産婆さんが来られ、言われるままにタオルや洗面器などを用意して、産婆さんの食事を作り、お手伝いをしました。利三郎先生は産湯を沸かして、行ったり来たりしながらお祈りをされる。産婆さんが、「先生、少しは座られて、お祈りしましょう」と、笑顔で話されました。穏やかな時間が流れ、元気に誠さんが産まれました。

徐々に心臓が悪くなってきたため、牧師館を辞し、私(和美)の母との生活が始まりました。広瀬ナカ(操の母、明治生れ)、広瀬フサエ(私の母)、私と四人の生活でした。

母は私を育てるため(父親の役目)、八幡製鉄所病院の調理

員として、三五年働きました。叔母が元氣な時は、家事をしてくれたので、母も元氣で定年を迎えることができました。

昭和三十年代となり、日本でも心臓手術が始まりました。十人手術して、三人助かりました。叔母はその内の一人です。

その後、叔母のみ命が与えられ、三回の心臓弁膜症手術をいたしました。今も永久カルテとして、保存されています。

一回目の心臓手術の時、叔母はとても心を痛めました。「死」を恐れたではありません。「生きる」ことで、兄弟姉に経済面で迷惑をかける、この事で非常に悲しみました。

利三郎先生にお祈りしていただきまして、「神の国と神の義とを求めよ」、この御言で信仰の基本ができました。

一回目の手術で、五年の命と宣告がありました。術後二年目に、男の子が一人おられる方との、結婚のお話がありました。下川泰広様、薫子様「結納のお茶」のお手伝いをさせていただきます。下松光子様よりこのお話がありました。

池田家は代々医師の家庭で、豊かな生活を送っていました。池田家の長女の方が十八歳の時にクリスチャンになられ、自分には恵まれた生活をさせていただいたので、今より後は恵まれない孤児達の力になりたいと、生涯を捧げられた方です。現在、九十歳を過ぎておられます。

長男さんは、熊本県にも赤十字社が必要だとの事で、その

創立者です。叔母のご主人となった方は、「自分は勉強が苦手なので、化学を専攻した」との事で、新日鉄で研究していました。またご主人は、お手伝いさんが二人もいる家庭で育っているため、経済的自立ができていない方でした。

叔母と結婚をして、池田家に頼らず、自立した生活を送りましたので、池田家から大変喜ばれました。その陰で、私の母が時々手助けをして、池田清風さんによくよくお話をしていました。叔母は料理が上手でしたので、喜ばれていました。そのご主人も癌でなくなり、再び私と母との生活が再開しました。

二回目、三回目と心臓手術が続き、私と母は頑張って看病いたしました。「操さんは、利三郎先生と同じように、鉄骨精神ね」と、三人で笑顔で話していました。三人はいつも一緒に楽しく笑って、時には喧嘩をしてすぐに仲良くなり、穏やかな時間を過ごしました。

ペースメーカー埋め込み手術三回、腰椎ヘルニア手術一回直腸脱手術、肺炎、腸閉塞、血小板減少(癌細胞)症、白内障など、病気の中を歩きましたが、いつも明るく、前向きに物事を考え、くよくよせず、嘆きの言葉を聞いたことがありません。

晩年四年ほどは年齢も重なり、看病、介護の日々でした。

母も私も、身体は大変でしたけれども、心はいつも豊かでした。叔母の信仰によつて、私も母も助けられました。

昨年、二回目の直腸脱の手術で、黒崎の九州厚生年金病院に入院しました。ワーワアリンの薬を与薬中のため、調整をしました。採血して五分間抑えると止血します。手術当日、若手医師が二分間でテープで固定しましたが、片方では出血が止まらず、流出して肩から爪の先まで四センチほど腫れ上がり、手術中止となりました。叔母も家族も悲しい思いの中を通りました。

院長と理事長が来て、「操さん、気持が治まらないでしょう。裁判されても良いです。医者が悪い」と説明がありました。

叔母は答えました、「裁判はしません。それゆえ、若手医師を九大に帰して、基本を学ばせてください。人の話を最後まで聞く大切さを、もう一度勉強させてください」。「本当に、それでよいのですか？」と、何度も話されました。

叔母は、人の過ちを許すことのできる人です。

心臓手術担当の瀬々先生に、「私が死亡した時の病理解剖はやめます」と言うと、先生は「操さんの意思を尊重しましょう。若手医師を育て直します。生きている時に、十分に医療に貢献してくれました。ありがとう」、「しかし、残念だ」。医師も正直に話しておられました。

萩原中央病院に入院中も、トラブルが二回ありました。病室を歩いていました。前日、ナースコールが外されていました。頭部打撲のため頭内出血。二回目も同様に腰椎圧迫骨折。悲しみの中を通りましたが、叔母はここでも若手医師、看護師に基本を学ぶ時を与えさせました。

この時は最終的に、下川泰広様、薫子様が愛の労をしてくださり、私と母を手助けしていただきました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

私は仕事に行く時、必ず「神様、操さんの命は、全て御手に委ねます」と、お祈りしていました。

叔母が召天した日は、私が休みの日でした。桜の季節なので、母はローズ系、私は桃色の服にて病院に行く途中で、「携帯電話に「急変です」との知らせでした。神様が私の休みの日に、母を動揺させないように、時間・空間を支えてくださいました。

付き添いの平石様も、看護学校の後輩のお母様で、良い方に巡り会えました。クリスチャンの方で、叔母と共に聖書、賛美、お祈りと、幸せな時間を過ごしました。名も知らず出会った方々も、その時々々に力を貸していただき、叔母は幸せでした。

操叔母の意思により、皆様から戴きましたお花料は、すべ

て献金とさせていただきます。皆様の温かい心に感謝申し上げます。

告別式の二日後には、私の勤めている福祉施設も看護師不足のため、早出、残業をしましたので、少々疲れを感じました。御礼を一人ひとりと思いつつ、遅くなりましたが、「ぶどうの木」の紙面にて、お許しくださいませ。ありがとうございます。

母も時々、木曜会に喜んで出席しています。どうぞ皆様、よろしくご指導をくださいませ。

尼田様、告別式の写真をありがとうございます。従妹達が、教会はいいね、自分も行きたい気持ちになったと、話していました。

母は建て売りの家を買いましたが、五五歳の定年の時、全て新築に立て替えました。尼田様が玄関にワックスを掛けていただき、母は「五五歳の年齢になった気持ち」と、喜んでいきます。

皆様のお祈りに加えていただければ幸いです。

皆様のご健康をお祈り申し上げます。

乱筆、乱文、お許しくださいませ。

## 池田操姉を追悼して

平 石 ミ サ ヲ

(最後まで付き添われた方)

みーちゃんが逝って、早や四日の夜を迎えています。

今日、教会に礼拝に娘と行ってきました。改めて信仰の素晴らしさ、みーちゃんを通して、神様を信じることを教えていただき、みーちゃんに感謝いたします。みーちゃん、ありがとうございます。みーちゃんの長年の信仰生活が、良く分かりました。

二八日、いつもの通り病室に入室して、「みーちゃん、ただいま！」と言う。その日の夜勤は西屋さんでした。「池田さんが回復されたので、部屋の婦長が家族に尋ねるように言われているけど、と言われたのでお願いします。二階、四階の方が、私は好きですから」と、勝手なことを言っていました。「和美さんとは、今夕でもお話しときます」と！話し合う間もなく、逝ってしまわれました。

記録のノートを見ていたら、二八日の夜は痛みを強く感じていたようです。十九時三十分、体温を測ると三五度二分、あまり低いので二十時に計り直すと、間違いなく三五度五分

でした。

相当の痛みがあるようでしたので、看護師詰所に行って、二三時、少し早いけれど、西屋さんに入ってもらいました。

みーちゃんも我慢強い人だから、それから唇を濡らして、いつもの通りに早朝四時に目が覚め、痛みがあつて、それからモーニングケアしたり、窓を開けたり、時間を稼いでおりました。

何とかかんとかして九時になり、ちょうどラシックスのシリンジにエラーが出て、看護師が九時に入室しましたので、昨夜二三時に使つて以後、時間が経っているのです、入れてくださいとお願いして、挿入してもらいました。その日は九時まで、三浦ドクターは入ってきませんでした(二八日夜は見えませんでした)。

「みーちゃん、楽になるからね。頑張つてね」と、左手で握手して、「また夕方来るよ」と言ったら、うなづいて、「では、行ってきます」と、大きな声で部屋を出ました。婦長と西屋さんが詰所にいたので、「お願いします」と頭を下げて、エスカレーターへ。

それからすぐに、みーちゃんは逝つたの。私が部屋を出たのは、九時二十分くらいだったと思う。

桜満開の時、私は生涯の中で、みーちゃんとの別れは、深

く印象に残ることでしょう。今までお世話させていただき、ありがとうございます。

元気な時は笑つてお話しして、歌つて、深夜に食べて、飲んで過ごした懐かしい思い出が、病院の窓をバスから見るたびに甦ります。

和美さん、お母さんを大切にしてくださいね。

今まで、本当にお疲れ様でした。みーちゃんも、喜んでいきますよ。

寝付かれなくてペンを取りました。乱筆乱文、御免なさい。

四月二日 午前一時記

広瀬 和美様

平石 ミサヲ





## 祈りにこたえられて

榎 本 和 義

八幡前田教会が現在地に建てられたのは、昭和二一年のことでした。戦争が終わって、まだ間もないとき、河本小太郎兄弟が主のご愛に応えて、教会を新築し、敷地と共に奉げられました。そのとき、教会正面には西鉄の路面電車が通っていました。河本兄はご自分の土地を半分に分けて教会から本通りに出るための通路としてくださいました。それによつて、電車通りから直接教会へ入ることができました。戦争によつて疲弊し、一面焼け野原になつた所に教会が出来て、大変大きな恵みでした。また、表を通る電車から教会を見て、救いに導かれる方々もありました。

いつごろであつたか分かりませんが、正面玄関の左側に一軒の建物が建てられました。大西さんという方が住むようになりしました。河本小太郎兄の知人で住む所を求めていたようです。小太郎兄は教会の横にある土地を貸して、家を建て仕事が出来るようにしてやりました。この方の仕事は木製の風呂桶を作ることでした。また、当時、漬物などをいれる樽も作っていました。板を短冊形に切つて円形に並べ、竹でタガ

を作つて桶に仕上げるのです。私も子供の頃、その作業を眺めるのが楽しみでした。手作業が中心で、日曜日は仕事も休みでした。

ところが、社会が活気付いて、高度成長期を迎えて、彼の所も仕事が増えてきました。また、住宅事情が良くなるにつれ、それまで共同浴場が中心だつた入浴が、各家庭で風呂桶を持つようになつて来ました。それによつて、風呂桶を作る仕事は急速に増えて、日曜日も休まず仕事をするようになりました。また人手も足りないので、機械を導入して効率を上げることになつたのです。風呂桶も楕円形の桶型のものから、ヒノキ材を用いた四角のものが主流になつてきて、木材を加工するため、電動式「のこや」「かんな」が利用されるようになったのです。当然、騒音問題が発生します。ことに、隣接しているだけに日曜日の礼拝などになると、説教が聞こえない事態になりました。何度か申し入れをしたこともありましたが、彼も生活がかかつているだけに、事は簡単に進みません。

結局、窓を閉め切る以外にありません。冬場はそれでしのがますが、夏になると大変です。こちらも窓を開け、相手も作業場の窓をあけますから、騒音はダイレクトに入つてきます。当時、礼拝堂にはクーラーなるものはなく、窓を開けて団扇を使う程度です。また、会堂の屋根がトタン葺きですか

ら、真夏の日差しに照らされて、室内はオープン状態です。そのうち団扇に代って扇風機が使われましたが、熱風を掻き回すだけで、一向に涼しくなりません。汗を流しながらの礼拝を続けました。

昭和四四年七月二七日付けの「牧師通信」(『汝ハ我に従え』榎本利三郎・百合子師記念誌所収)には、次のような一節があります。「教会も会堂が暑いので、窓を開けると、戸外の騒音で集会の話が聞き取れないで困りましたので、マイク、スピーカー、アンプを購入して取り付けましたので、後方の席でもよく聞こえる様になりました」。

拡声器の設備はそれまでも東兄が作ってくれたものがありました。本格的なものを入れたのはこの時が初めてだったのでしよう。また、騒音は隣家のものばかりではなく、路面電車の騒音も結構なものでした。しかし、これで万事解決にならず、忍耐の時が続きました。

やがて時代は変わり、風呂桶の需要もユニットバスなどになり、また隣家のご主人も他界され、騒音問題は終わりました。また、路面電車も廃止になり、いよいよ静かな環境になって、隔世の感があります。

その後、隣家は借家となり、幾つかの借り手を経て、つい先ごろまで、ラーメン屋が営業していました。近くに飲食店

があつて便利でしたが、漂ってくる豚骨スープの臭いには閉口しましたが、それ以上に、玄関までの通路が左右の家に挟まれて、表から見えにくく、葬儀などで多数の人が集まるとき、窮屈な思いがしました。なんとか敷地を広げる事が出来ればとの願い、また、騒音問題の頃から、隣接地が教会のものとなればと、多くの聖徒たちが祈つてきました。その中にはすでに天に召された方々も多くあります。しかし、現実的には、隣家の借り手は替わりますが、土地が売りに出される気配はありません。

そうやって時は過ぎてきました。数年前にラーメン屋さんの主人が病気になる、しばらく店を休まれたことがあります。その頃、いろんな噂話が聞こえてきましたが、主人が元気になられて、店も再開され、このまま続くのだと思ひました。しかし、主は祈りを忘れておられたのではありません。昨年になつてすぐ、店が休みになり、また病気だろうかと思つていたとき、突然、周囲に防護幕が張られて、家を取り壊すことになつたのです。どのような状況になるのか、全く分かりませんが、一週間ほどで建物はなくなり、更地になっていました。これはきつと神様が働かれる時だと感じました。私は教会の玄関から隣地を見ながら、なんとかこの土地を与えてくださいと祈つたものです。跡地になにか計画があるのかも

しれません。また、ラーメン屋さん以前からこの土地を欲しいと聞いていたので、新しく店を始めるのかとも思いました。春になっても跡地はそのままの状態でした。

ところが、六月中ごろでしょうか、ある不動産屋が訪ねてきました。隣地の地主が土地を売りたいとのこと、ついにはまず教会に意向を尋ねてもらいたいと言うことでした。あまりのことに、私は興奮しました。長年の祈りと願いがここに実現しようとしている。さっそく、是非譲って欲しいと申し出ました。神様の備えられた時でしたから、全てのことは熟した果実が地に落ちるように、順調に進みました。また、そのための必要一切を主が満たしてくださいました。ただただ感謝と喜びです。所有権移転の登記がなされ、八月はじめて教会の敷地となりました。その後、整備され、これまでそうであったかのように、用いられています。

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます。この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女と言うでしょう、力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださったからです」(ルカ一・四六〜四九)。

「主は、あわれみをお忘れにならず、その僕イスラエルを助けてくださいました」(ルカ一・五四)。

主の大きな恵みを忘れず、感謝しつつ、いよいよ熱心に主に仕えていきたいと切に願っています。

なお、土地の購入にあたって、教会員の皆さんに差し上げた文書を記録として掲載しておきます。

#### — 文書一 —

主にある兄弟姉妹へ

「しかし、聖書に書いてあるとおり、『目がまだ見えず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』のである」  
(第一コリント二・九)。

梅雨空のすっきりしない天候が続きますが、皆様お変わりなく、日々、主の恵みのうちお過ごしのことと思います。また、皆様の祈りに支えられ、教会員一同、魂の恵みにあずかり、今日あることを心から感謝しています。

さて、今日は皆様へ感謝な報告とお勧めをしたいと思います。

すでにご承知の通り、教会正面入り口の左側に「ラーメン屋」がありました。今年に入ってから、「ラーメン屋」が廃業し、立ち退かれました。その後、建物も撤去され、更地となつていきます。この土地は以前から、教会の敷地に利用できればと願ひ、祈つてきたところです。この地に旧会堂が建てられて程なく、「大西風呂桶屋」が借地して建物を建て、木製の風呂桶などを製造販売するようになりました。風呂桶の製造には、木材を調整裁断などの作業でかなり大きな騒音が生じ、夏場など窓を開けての礼拝では声が聞こえないほどで、大変困つた時期があります。やがて風呂桶屋も廃業になり、その後次々と違つた借家人が入居し、教会も建て変わりましたが、教会の地所として用いられる時期がませんでした。ところが、先般、不動産屋を通して、教会で購入する意思がないか打診されました。表通りに面して、玄関へのアプローチが狭くて、教会の存在が分かりにくい状態でした。この土地が与えられれば、玄関前広場ができ、身障者用パーキングも取れます。また、教会入り口の真横にどんな建物が建つか分かりませんし、将来手に入るかどうかともわかりません。諸般の事情を考えて、祈つていました。その結果、長年の祈りに主が答えてくださったことを確信して、神様の導きを信じ、売買契約をしました。長い間、喉に刺さつたトゲが取れたような

喜びと感謝で一杯です。早急に玄関周りの整備を整えて、移転登記を行うことにしています。

ついでには、そのための必要経費が満たされるようにお祈りいただきたいと思ひます。また、この恵みの業に参加していただきたく、特別献金をしたいと思います。礼拝献金のとき、また、特別献金箱に「土地指定献金」として、感謝しつつ、させていただきます。

費用の概算は土地代金 8,510,000 円、手数料 350,000 円、整備費 1,000,000 円を予算としています。信仰に立つて踏み出しましょう。

二〇〇七年七月一五日

八幡前田教会 牧師 榎本和義

― 文書二 ―

主にある愛する兄弟へ

「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかつたことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられたのである」(第一コリント二・九)。

主の恵みを感謝し、聖名をあがめます。

猛暑の夏もつがなく過ぎて、はや秋色になり、木犀の香りが漂う時となりました。皆様も、主のご愛と祝福のうちに  
お過ごしのことでしょう。

さて、長くお祈りいただきました教会正面玄関周りの整備が完了しましたので、ご報告申し上げます。

ご承知の如く、思いがけない神様の恵みによって、玄関横の隣接地が与えられました。長年の多くの祈りに、主が答えてくださったことです。信仰をもって、購入の手續きに入り、無事に契約・登記手續きが終わりました。続いて、八月の暑  
い中でしたが、整地され、フェンス、アプローチ拡張、舗装、昇降機設置等の一連の作業が進みました。引き続き、車の出入りに支障となっていた歩道の緑地部分を撤去して舗装する工事も終わり、最後に隣地とのフェンスにそって植木を入れてもらいました。今では以前どんなであったか、想像できないほどにきれいになりました。皆様の祈りと奉げ物を心から感謝いたします。全ての必要も豊かに主が備えてくださいました。その事も併せてご報告いたします。

収 入 支 出

特別献金	9,674,000	土地購入諸費用	8,938,222
建物維持積立	6,125,329	土地整備費	1,785,000
伝道隊本部より	3,000,000	昇降機代と付帯工事費	758,100

歩道緑地撤去費	420,000
植栽費用	153,785

小 計	12,055,107
建物維持積立へ繰越	

合 計	18,799,329	合 計	18,799,329
			6,744,222

主はこのように豊かな恵みを与えてくださいました。心から感謝するとともに、この恵みに答えて、主のみこころに従って参りましょう。

二〇〇七年十月二一日

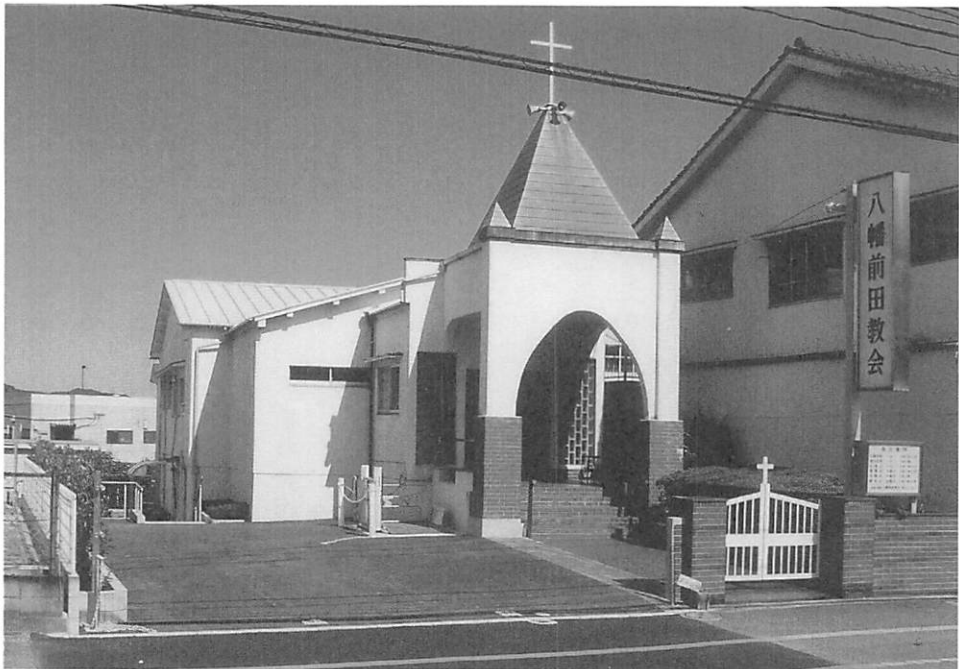
基督伝道隊 八幡前田教会 牧師 榎本 和義



以前の教会玄関



土地取得感謝式



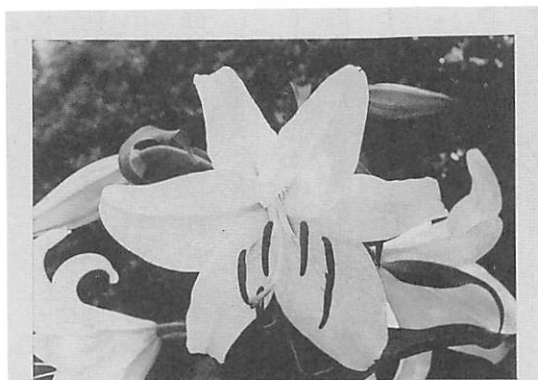
現在の教会玄関

## 花によせてうたう賛美

廣 田

壽 (前田)

在、主、『平安、喜び、希望』の実、感謝！



花を愛で

心和みつ

八十路旅

奇しきみ業

たたえつつゆく

## アクシデント

首 藤

正 (前田)

十年来乗っている車は、走行十万里を少し上回っているが、バンパーが相当傷んでいる。人にこすられたり、自分でコツンとやったり。いつぞやは、夜闇の草むらに潜む溝に前輪を落として、下端にギザギザをこしらえたり、見るも無残な有様を呈していたので、取替えのきく中古品を当たってもらったところ、皆無と分かり、走行に支障あるでなしと、欧米人感覚のつもりで、そのまんまにしておいた。ところが先日、脇道から後退して出てきた車に、前部をいきなりドカンとぶっつけられた。

たまたま物取りに車を降りていたので、衝突の瞬間を見ておらず、ドーンという音で飛んで帰ってみたら、あちこちペンは剥げ落ちるやら、ロゴマークは脱落しているやらで、加害者はそこに立っており、庇に手を当てて、「すぐ、保険屋に連絡します」と言う。

実は、向かいの主人で知らぬでなし、「この程度なら、タッチペイントを塗りたくるときますから、気遣い無用に願いま

「と再三再四辞退して、そのまま用足しに出かけて帰ってくと、また出てきて、どうでもこうでも保険で修理しますから」と言つて聞かず、カミさんまで飛んで来て口添えする。

私もだんだん弱気になって、それで気が済まれるのならそれでもいいわという気になりかかるが、傍にいた家内はえらく強硬で、「絶対に駄目ですよ。修理してもらうなんて、とんでもない。ご近所さん同志、相見互いですから……」と、私の尻を叩かんばかり。

折りから、子供を迎えに寄つた娘までも、「私だって、これ以上ひどい疵をつけた相手から許してもらつたことがあるわよ」と、母子結束して修理応諾に難色を示す。

こちらを立てればあちらが立たず、あちらを立てればこちらが立たず。敵を腹背に受けて、全く立ち往生してしまつた。切羽詰ると、祈りはなかなか出てこない。内心に耳を傾けるのが精一杯であつた。

一日の初めに、「今日一日、主の良しとされるとおりであらしめ給え」と、一括してお願いしたことが生きたのかどうか。あれほど断つても言ってくるからには、それがお導きなのかもしれないと、ついつい考えてしまい、「じゃ、やつてください」と返事すると、十分もせぬうちに相手の保険代理人から電話がかかつてきて、具体的に修理業者や代車や日程まで言う

ので、あれよあれよと引きずられるようにして持つていかれ、代車と引き換えに業者が引き取りに来て、二日間直つてしまつた。

疵の所だけ元通りになれば十分で、便乗は不可と言つて置いたのに、バンパーを丸ごと取り替え、引つ込んだ部分を板金で引き出しましたからと、コメントがあつた。別の隣家の主人が通りかかつて、「立派になつたじゃないですか」と、ニヤリと声を掛けて行く。

向かいの主人に見てもらい、「相済みませんでした」とのご挨拶に、「こちらこそ申し訳ないようで」と言うしかなかつた。終始おかんむりの家内は、何日も一言も口を利いてくれないので、大弱りなのであるが……。

それに、見違えるほど顔良しとなつたのを見ようとはせず、そんなのに誰が乗れますかと断固拒否の老妻に、トホホ……。私は言葉を掛けかねて、ここは日にち薬を頼むしかないかと、じつと辛抱の甲斐があつたか、なかつたか。十日位して後、たまたま口を利いた向かいの主人の出ように、心境の変化をきたした家内は、もとの柔らかさを次第に取り戻したようので、やつと愁眉を開くことができた。万歳、感謝！



## 夜道

首 藤

正(前田)

夜の散歩は、昼間とはまた別の面白さがある。暗さが目障りな物を引つ込ましてくれて、見るものが曖昧で、かえって床しくでさえある。何となく靴音の響きも柔らか。

空を見れば、一面の暗い海に、ポツンポツンと星の光が点在し、月も浮かんでいいる。いつも同じ所にはいずに、毎日少しずつ遅れて出てくるのが、自分にその気がなくても、人をじらす効果がある。昔の人は面白がつて、その事を「居待ちの月」、「立ち待ちの月」、「寝待の月」と読んだ。極端になると、  
名月や 池を巡りて 夜もすがら  
と観賞する人もいた。

そう言えば、昨年の仲秋の名月はよかった。皓皓(こうこう)と全天に光を投げかけて、天地が静まり返っている感があつた。なのに、散歩の道筋の家からは、誰一人外に出ている人はいず、正に私だけの独り占め状態だったので、つい蕪村の  
月天心 貧しき町を 通りけり  
を思い出したほどだった。

三月の終りには、桜。途中の高台の公園の桜が水銀灯にライトアップされて、あやしいまでの美を湛(た)えて見えている。

五月の末は、螢。始めは道沿いの川の流れの上、一点の光がかすかに動く。二日目は二、三匹。日を追うて殖えていつて、一週間もすれば、岸のあちこちに見物人の群れが出来る。

夏は何と言つても、夜の天下。昼間の暑さを避けて、日が落ちるのを待つてたかのようにどつと繰り出す、犬連れ散歩者達で賑わう道は、手ぶら者には肩身が狭くて、あつちよけ、こつちよけして、渋滞そのもの。

秋が来て、涼気が流れるようになると、人つ子一人見えなくなる。閑散の道を行つていると、いきなりえも言えぬ香気に突き当たる。金木犀である。芳香をできることなら包んで持つて帰りたいほどだが、深呼吸で我慢する。

師走。残念ながらこの一、二年下火となつたが、つい先頃までは、イルミネーションの月。思い思いに想を凝らし、妍(美しさ)を競う。家並みを迎る楽しみがあつた。

ミニ・ナイヤガラ風、螢の袴(ひしめ)くツリー、不夜城、櫛(そり)を引く馴鹿(トナカイ)、文字と記号に彩られた窓、などなど。とりどりに明滅する光のトンネルをくぐつて行けば、どうしなくてもキャロルが口が上がつたものだった。

年が明けると、申し合わせたように光が消える。光輝の道はもとの暗夜航路と化す。うなだれて、トボトボとしばらく歩く。途中の高台の公園が目に入ると思い出すのが、桜の美観。

あと三ヶ月したら、あれが見られる。心なしか足取りも軽くなり、散歩を続けるのである。

### 〈追伸〉

いつしか胸に浮かぶのは、歌人西行と聖徒パウロのこと。生涯狂ったように花と歌詠みに明け暮れた此のひと、終生、狂わんばかりに主を慕い求めて、主の救いを証ししてやまなかった彼の人と。

ねがわくは 花の下にて 春死なん  
そのきさらぎの 望月(もちづき)の頃



## 導きの御手

秦 夕 ネ ノ (前田)

### 〈一冊の本との出会い〉

小学校五年(昭和五年)のとき、同級生で、私の家の前に芳子さんという方が居られました。その方のお兄さんが先生でした。その先生が、「一粒の麦」(賀川豊彦著)の本を読んでみると、貸してくださったのです。当時、少女クラブなどの本を読むぐらいでしたから、すごく心に残りました。

本をお返しした時、先生から「感想は？」と聞かれ、何を答えてよいやら……、私は「この本、普通の本と違うね」と答えただけでした。先生は、「ウン、それが分ればいいよ」と、微笑んでおられました。

それから数十年後、鉄町教会に賀川先生が来られ、素晴らしいお話に當時を思い出して、心温まる思いでした。

### 〈日曜学校〉

これも小学校五年の時の話ですが、その当時、遠賀郡岡垣町は村でした。診療所は吉木にある宮崎医院一軒でした。そ

ここに一人娘の静子さんが居られ、同級生で、とてもはつきりした性格の元気な方でした。

休み時間の時の事です。その日は土曜日でした。私の所に静子さんが来て、話しかけられたのです。

「あのね、明日は日曜日でしょう」。

私は「ウン、そうね、なんね」と聞くと、

「うち、日曜学校に行くんよ」。

そこまで聞いて、私は初めて聞く日曜学校に驚いて、思わず、

「あんな、日曜日まで学校に行くんね」。

突飛な私の答えに戸惑われたのでしょうか、ただ、「ウン」と答えられただけでした。

よく考えてから返事すべきでした。きっと私を日曜学校に誘ったかたではなかるうかと、今思うと残念です。当時海老津に伝道所があったのではないだろうか。今は想像するのみですが、それも御心だったかもしれないと、思い出を深くしております。

静子さんはその後立派な医者になられ、今は老いて静養中だと聞きました。

### 〈讚美歌との出会い〉

主人の実家は、津屋崎の宮地嶽神社の下で、正月は大変多

忙でした。

そんな頃、子供達のクリスマスの歌の練習があるから行きませんかと誘われて行ったのが、津屋崎教会でした。そこにアメリカから来ておられた女宣教師ピート先生の指導でした。私は初めて教会に足を踏み入れ、讚美歌にも出会えたのです。

子供達が楽しそうに、「お星が光るピカピカ……」と大声で賛美している姿、大きな声で歌われる先生もきれいなお声で、楽しそうである。「さあ、皆さん！一緒に」、「ラクダが通るカッポカッポ……」。初めて歌った子供讚美歌に、私の心も晴れやかでした。

### 〈分冊聖書の思い出〉

昭和二五年、宮地から八幡市春の町に引っ越しました。

やがて娘の敏江がカトリックの幼稚園に行き始めました。敏江は左利きで、何をするにも左を使うので、「先生、この子は左です」ところが先生は、「私も左利きです。神様は右も左も使えるようになさったので、どちらでも、できれば感謝ですよ。心配いりません」と申され、先生に私の方が教えられ、神様のまことを知らされました。

ある日、女性の方が、「これをお読みななれば、幸せになれ

ますよ」と持って来られました。それが分冊聖書でした。私は、こんな本を読んで幸せになるなんて、と心で不思議に思いました。私は聖書が何だか分かりませんが、マタイ、マルコ、ルカの分冊を買って読んでみたものの、書かれていることが分らず、そのまま棚に上げたままでした。

### 〈家の新築〉

現在の丸山の土地に家を建築する計画を始めたのは、昭和三十年、私が三六歳の時でした。主人は、休みの日に丸山に来て土地均しをしたり、一人で労働に精を出してくれました。当時、まだ上の方には桜の木が多数あり、春になると、桜見物に弁当を持っておいでる方も多かったです。

私の所の近くに、磯部さんが住んでおられました。主人が夏の暑いときに汗を流しながら作業しているのを見られて、磯部さんは冷たいお茶などを持ってきてくださったのです。主人はその話を喜んでおりました。

その頃、山水が所々湧き出ていまして、その山水は下に流れ、道路脇の小さな川となっていました。建てた家は舗装していない道路の横でしたので、車を通るたびに砂埃が舞い上がります。それで毎日、小さな川を堰き止めて、水撒きしました。また、アヒル五羽くらい飼って、泳がせたりもしまし

た。

今では団地となり、桜も数本残っているだけです。道路も舗装されて、小さな川は見えなくなりました。「物は変り、世は移れど……」（讚美歌四八六番）を思い起こします。

### 〈教会へ〉

十一月に春の町から丸山に移り、分冊聖書も共に引越しました。主の見えざる御手の業を見るように恵んでいただきました。磯部さんには建てる前からいろいろお世話になっていましたが、彼女が門司大里教会の信者さんだったことを初めて知りました。それから、敏江と磯部さんの娘さんが同年だったこともあって、お近づきを密にさせていただき、私への伝道が始められたのです。

まだ下の子が幼稚園に通っていましたが、日曜学校にと誘われ、三人の子供を近くの鉄町教会に行くように導かれました。磯部さんは十時くらいになると、「秦さあくん」とおいでになるのです。最初の頃は、磯部さんがおいでた、との思いがあったのです。聖書を持ってきて祈ってください、聖書を読んでも分らないことばかり、という状態でしたが、暗中模索の中にも、次第と平安が与えられるようになり、本当に祈りが届くのだろうかと思ひ、ある日、私は祈りました。「神様、

本当にあなたが居られるのでしたら、お答えください」と。何と相手のいい祈りでした。ところが夢うつつに、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」の御言にびっくり。夢ではない、確かに私の心に響いたのです。

私は御言を知りません。磯部さんが読んでくださったことを思い出して、その事を話しました。磯部さんは、「秦さん、神様の御言を戴いたのですよ」と申されました。私は不思議な思いでしたが、次々に、「十字架の言は滅び行く者には愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには神の力である」(コリント一・十八)、一日一日、命の道を歩かせてもらっていることを分らせていただくようになり、受洗を思うようになりました。

### 〈受洗の恵み〉

昭和三十一年くらいだったと思いますが、枝光に教会があった頃、医者をしてもらった後藤さんと言われる方の記念会をいたしますのでおいでください(その頃、後藤さんの家族が丸山に住んでおられた)と、お誘いを受けましたので、磯部さんと私は何も分からないまま、同席させていただきました。その時の牧師さんが榎本利三郎先生でした。先生と後藤さんは

良くご存知の間柄で、親しかったそうです。

その時の先生のお話全部は記憶しておりませんが、聞きながら、私は本当に生かされているのだと感動させられました。人はみな呼吸をして生きている、神様に戴いた酸素により呼吸できている、それも無代価であるが、みな感謝することをして、万物を創造された神様を崇め感謝するようにと、私は心打たれ、恵まれ、感謝して帰りました。

そしてその事を主人に話し、私は前田教会で洗礼を受けたいと申しましたら、主人は私の顔を見て、今、磯部さんの導きで大里教会の牧師さんにも来てお話をくださったているのに、前田教会で受洗しますと言えるのかと言われ、何とお粗末な私だったと心しめられました。

様々な中を通していただき、このような者が信仰生活を守らせていただけるように、鈍い歩みでございましたが、大里教会に行くように導かれました。

「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしくして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」(ピリピ二・六く八)。

私はこの御言を繰り返し、繰り返し心に刻みました。無き

に等しい者をここまで導かれた神に感謝し、新しく生まれ変わることを許されましたのは、昭和三十三年十二月のクリスマスに洗礼を受けた時でした。三九歳でした。

イエス・キリストの十字架の贖いによって新しく生まれた私、すべて神の摂理、啓示です。書き尽くすことのできない恵みの数々、神の御名が崇められますようにと、ひたすら祈り続けました。

磯部姉は昭和三四年にご主人の転勤で、千葉に行かれました。その頃より家庭集会を持たせていただくようになりました。私が受洗して二年後(昭和三五年一九六〇年クリスマス)に、主人も洗礼に預からせていただきました。感謝は尽きません。八幡中央町から大里まで、当時電車で一時間かかりました。子供が小さい時は、鉄町教会で学ばせていただきましたが、家族全員で礼拝出席できるようにお導きをいただきました。子供達も全員救いに預かり、主の御愛に感謝するのみでございます。

### 〈信仰の戦い〉

生活は豊かではありませんでしたが、神の御愛の中で、責めも飢えも、愛いも悩みも、主の十字架による贖いの確信と勝利に励まされてきました。そして、家庭集会を持たせてい

ただいて十八年、ただ夢中でした。近くに分冊聖書を持ち歩いたこともあり、秦さんと親しくするとキリスト教に引き込まれるから用心しなさいと、噂されたことを聞きました。子供も、お前の家はアーメンやないか、アーメン、ソーメン、冷ソーメンと言われると聞き、「神様を知らない人だから可哀想なのよ。祈っているから心配しなくてもいいのよ」と励ましたことでした。

また、こんな事もありました。祖父は祖母の法事の折、和尚さんに「春夫達がキリスト教になって困っています。よく言い聞かせてください」と。主人は横向きになって、笑っていました。和尚さんは何も言われませんでした。様々の中、主に守られての今日ある恵み、感慨ひとしおです。

やがて祖父も老いて私達と同居することとなり、祈りの内に、最後は「すべてを委ねる。よろしく」と心砕けて、牧師さんに祈りを求めて全うすることができました。

月日は矢の如く、この歳まで御手の内に守られ、感無量でございます。

### 〈前田教会に導かれる〉

磯部さんは昭和五十年に千葉から九州に帰ってこられ、八幡西区沖田町にお住みになりました。私は度々お宅を訪れ、

交わりを密に持たせていただきました。その時はすでにパーキンソン病が進んで、ご不自由な身と成っておられました。

当時、大里教会牧師山本先生の体調が優れず、入退院が続きました。そんな時、いろんな事で悩まされ、磯部さんに相談に行きました。その後、榎本先生に私の事を話されたそうで、先生は「あなたは秦さんが悩んでいるのに助けてやらないのですか」と申されたそうです。

磯部さんは、私に前田教会においでと誘ってくださいましたので、大里教会から前田教会へ転会させていただきます、ただ主の憐れみと心から感謝いたしました。

初めて榎本先生と話す機会が与えられ、日暮れまで語り合ってきたこと、感謝のほかありませんでした。前田教会の日本基督教団と違う点など、様々な事をお教えいただき、また分からない事は何でもお尋ねくださいと、御愛のこもったお心遣いでした。何もかも語り終えて帰る途中、本当に身の軽さを覚えました。肩の荷が下りたと申しますが、まことの平安と御愛の深さを満たしてくださいました。

今病んでおられる門岡姉（昭和三九年（一九六四年）九月二十日受洗）も集会に導かれ、大里教会で共に信仰を持って励まし合った方でございます。

昭和五五年十一月、前田教会会員として、主の見えざる御

手に導かれ、皆様方の祈りに支えられて、信仰の歩みを深めさせていただき、現在に至っております。

「あなたの目の前には千年も過ぎ去ればきのうのごとく、夜の間のひと時のようです」（詩篇九〇・四）。

こうして見えないものに目を注ぎながら、これからも一足歩かせていただき、御許に行かしくめてくださるよう、祈る毎日でございます。

#### 〈家庭礼拝の恵み〉

昭和六二年、主人の退職を機に、主の憐れみによりまして家拝を始めさせていただくように導かれ、心から感謝いたしました。

当時は、旧約から新約へ交読いたしました。早朝六時、家拝から一日が始まる。このような生活のリズムに、主によって変えられました。

「主はわたしのために、みこころをなしとげられる。主よ、あなたのいづくしみはとこしえに絶えることはありません」（詩篇一三八・八）

本当に無きに等しい者、愚かな者に、「わたしにつながっていないさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていない」（ヨハネ一五・四）との御言に感謝させていただいてお

ります。

主の祈りから讚美歌を歌い、創世記の交読、心を合わせての祈りと祷告、様々な業と祈りに、本当に心は満たされ、今までにない大きな恵みを体験させられ、感激ひとしおです。

家拝を終えまして、朝食の用意を始めますが、夏などは窓を開けますので、ご近所に讚美歌が流れ、最初の頃は何だろうかと思われたそうですが、今は讚美歌だと納得してくださっているようです。

現在、聖書通読は新旧同時進行ですので、多く恵まれて感謝ですね。このような事、私は当時思いもつきませんでした。が、それも御心だったのかも、と自分なりに思わされ、感謝させていただいております。

主人と二人の家拝は、新旧約聖書九回くらいで主人が召天しましたので、今は主と共に家拝を続けさせていただいております。

今は八十路の旅で、ややもすれば疲れやすく、弱くなったなあとおぼやくことがあります。

けれども、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」(第二コリント十二・九)との御言が来ます。「それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。

「わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである」(同九、一〇)。主と共に居られるから、何事もすることができると、御愛の深さを思い、感謝でございます。

様々の中、信仰の終着駅である、天にある国籍を目標に、各駅停車で一日一駅、聖霊の杖を頼りに、いつも喜び、絶えず祈り、すべてのことを感謝しつつ、励まされております。

「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です」

(詩篇一一九・一〇五)

「キリストの言葉をあなたがたのうちに豊かに宿らせなさい」

(コロサイ三・十六)





## 受洗後の大試練

内 田 知 代（前田）

二〇〇三年十一月二四日受洗から約四年、最大の危機に陥った。二〇〇五年一月四日から臨時職員として三ヶ月契約で働き始めた。その職場は四月から新しい施設を請け負うことになっており、囑託職員として一年契約で働かないかと話を受け、お祈りをして決めました。

ここでの仕事は、私の短い勤めの中でも最も多忙で難しく、次から次に仕事が生じて、この多忙も五月で終わる、九月になれば終わる、十二月が過ぎればもう少しで終わる、と自分で励ましながら、結局、一年間続きました。この一年間は初めての経験も多数あり、私の実力では本当に出来ないことだらけでした。しかし、主に見守られて問題もなく仕事をこなす事が出来、健康面でもそんなに苦しむ事なく、全てがトントン拍子だったので、これは主からの使命である、と思い上がっていました。

そして、二〇〇六年の三月くらいからおかしくなってきました。仕事に対する燃え尽き症候群もあったでしょう。体調

も悪くなりました。信仰に対しても、主の恵みや信頼するとかは自分に都合のいい時だけで、イエス・キリストの十字架について疑問に思ったままで、最近ではそれさえも思う事なく、お祈りの時だけ「御名において」と言うものの、イエス様抜きになってきました。

職場は小さな組織で、就業規則や経理規則等はあつてないようなもので、決算も出来る状態でない。書類も整理されてなく、徹底的に根底から元に戻さないと全ての帳票など解決する事は出来ない状態でした。職場の移転もあり、事務用品・備品は誰も片付けようとしません。今までの職場では当たり前に出ていたことが、ここでは最低限のルール（遅刻ひとつとつても）でさえ職員一人ひとりに備わってなかったのです。

私は完全に律法に囚われていました。事務と経理を一人で担当している私にとっては、最初のうちはしようがないと思つていて、他の職種の職員からは「内田さんは何でも出来るから、これもあれもやってください」と言われ、私も調子に乗っていろんな事に口出し、手出ししました。

その年度末三月に管理職とのヒアリングで、上司から「内田さんがやってくれた事は感謝しているけど、いろいろと口出しすることに、職員の皆が迷惑している」と言われ、衝撃を受けました。私は、別に職場の皆のために仕事をしていた

わけでなく、縁の下の力になろうと、最初は思ってた仕事をしていた。押し付けがましくないようにしていたつもりだったので、私はこの言葉に反省することはなく、今までずっと人の所為にして恨んでいました。それが態度や言葉になつて職場の皆を攻撃していました。

二〇〇七年九月十一日に、最大の試練はやって来ました。職場のトップでもある正野眞宏兄に、退職を前提に職場の皆への不満を訴えました。以前からも何度か相談してお祈りをしていただいていましたが、この時の兄は私が訴えた事には触れず、私の内にある罪の解決について話してくれました。私はイエス・キリストの十字架と、自分の罪の問題が解決していない限り、サタンが付きまとうことが分かりました。

十三日に休みを取って一日主に祈って戦おうと思つていましたが、どうしていいか分からず、お祈りする事も出来ない、苦しいばかりで、よし、受洗の際の信仰告白に書いた聖歌を歌おう、何番だったかな、「ぶどうの木」を見よう、久しぶりに開いたそのページを見ると、「私は傲慢で自分は何一つ悪くなく、周りの人を許すことが出来ませんでした。心の中はいつも不安だったのですが、三浦綾子さんの著書の中で文語訳の詩篇第五一篇を読んだ時に心を打たれ、自分の罪に対

して涙があふれ、心から謝ることができるようになりたいと思いました」と告白していました。今の私にはこんな思いは全くなく、当時こういう思いをしていたことに驚き、自分の魂が詩篇でいう悪しき人、主を恐れない人、私の敵とは内田知代のことであることに、ハッとしました。

この事を思いながら、敵を内田知代に読み替えて、詩篇第二三篇から声に出して読み続けました。第二七篇五節で涙がどつと溢れました、もう一度読み直しても、どうして分からないけど、そこで涙があふれます。六節に「：それゆえ、わたしは主の幕屋で喜びの声をあげて、いけにえをささげ：」『いけにえ』って何だろうと思いました。先程の詩篇第五一篇を読み返し、十七節「神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心をかろしめられません」。私の頑なな心を砕いてくださいと祈りました。主に對しても、人に対しても傲慢であったこと等など主に証し、悔い改めました。その時だけスーっと心に平安が与えられました。それは十四日の朝でした。しかし、十五日にはまた何か不安な気持ち持が沸いて来ました。

十六日、聖日礼拝での聖言、サムエル記上第十五章十七、二三節でしたが、サウル王が主の言葉を捨てたので、主もサ

ウル王を捨てて、イルラエルの王位から退けられた。しかし、今は私には主との間にイエス様がいらっしゃる。私の罪をすべて十字架の贖いによって消し去ってくださった。サウル王のように滅びることもなく、こうして生かしてください。何も障害なく、ただあるのは、まだ頑なな魂だけである。

「本当にこれでいいのか、主から出たものであるのか」と迷って、正野兄にメールで相談し、返事がありました。

次はその内容の一部です。「あなたが悔い改め、平安が与えられたのは、神があなたを許し、受け入れられた証拠です。その事実を信じ続けるのです。私達の気持や状態は変わりません。それで信仰が上下するではありません。救われた事実を信じるのが信仰です。

もう一つは、悔い改めの中身ですが、ああいう事をしてしまったという行いの悔い改めであれば、それはまだ半分です。また同じ事を繰り返すので、また悔い改めなければなりません。罪を犯すあなたの存在そのものが禍いである、その私を捨てなければならないが、自分では捨てることができない、主が十字架にかかられたのは、この私がキリストと共に滅ぼされたのだ、この事を信じるほかにありません(ローマ書を読んでもください)。今生きているのは、キリストが死人のうちから甦って、私の内において生きている(ガラテヤ書を読んでくだ

さい)。このとき、『死んだわざを取り除き、生ける神に仕える』(ヘブル九・十四)事ができるようになります。この時、神と人の前に謙んぶことができます。

あなたは職場の皆に、迷惑をかけたと謝る事ができますか。放蕩息子は、『わたしは天に対しても、あなたにむかつて、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇い人のひとり同様にしてください』(ルカ十五・十八・十九)と徹底的に謙んぶたのです。厳しい事を言うようですが、己に死んでなければできないでしょう。本当の悔い改めはそういうことだと思います。そこまで光が与えられるよう祈っています。

この事は救いの奥義ですから、難しい事かもしれません。でも、避けて通れないところです。疑問があったら、またメールください。和義先生に導いていただくのも良いでしょう。十七日の夜にこの返事を読んで、始めはキツイ内容だと思いましたが、すぐに主は私がかわいいからここまで仰って下さるのではないかと涙が溢れました。ローマ人への手紙を第一章から読みました。「しかし、働きはなくても、不信心な者を義とするかたを信じる人は、その信仰が義と認められるのである」(四・五)が与えられました。こんな禍いである私をも、働きがなくても、主を信じるだけで義とされることはつき

りしました。放蕩息子について、正直この息子について考えたことはありませんでした。寛容な父や寛容でない長男のことしかなかった私には、謙る、己に死ぬことを思ったことがありませんでした。ここで、職場の皆に謝りたい気持ちがありましたが、なかなか己に死ぬ事が出来ません。何か企みがあるのではと思われるのがイヤだという気持と、主によって導かれるのなら、「人知ではどうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いを、キリスト・イエスにあつて守るであらう」(ピリピ四・七)、主の恵がある希望とで揺れ動きました。祈ってもどうしても、己の気持ばかりで御声が聞こえませんでした。

二一日に職場の会議があるので、その時までには答えが欲しいが時間がない、どうしようと思ひ、二十日に和義先生にメールを送りました。その日、仕事から帰り、静まってお祈りし、讚美歌を最初から自分が歌える歌だけですが賛美しました。自分が思っていた以上に、沢山の讚美歌が体に入っていた事に驚きました。自ら覚えようとしたわけではないのですが、これも主の恵みだと思ひました。賛美しながら、三位一体の神だけに頼る、信じるしか救われぬ事を覚えました。五二九番三節「胸の波おさまり、心いと静けし、我もなく、

世もなく、ただ主のみいませり」と与えられました。禍である古い自分を捨てること、周囲のことも気にならなくなりました。

会議に入り、皆に謝ろう、神様、力を与えて下さいと、ずっと祈りましたが、平安がなく、ドキドキして五二九番三節を心の中で賛美していました。すると、言いようもない、何か「ストーン」とスツキリした思いが湧いて、なぜか心が軽くなりました。信じられないくらいにドキドキも治まり、今まで葛藤していた思いもすっかりなくなりました。後で後悔するのではと思つても、全く後悔の思いも湧いてきません。私は、優柔不断で後悔することが多いのですが、なにか、己の思いでない清々しさです。本当にこれでいいのか、勝手に自分で納得しているのではないかと問いましたが、本当に後悔する思いがないのです。

「周囲のことも気にならなくなりました」と書きましたが、やはり、弱い者ですから、気になります。しかし、その都度、主を見上げて静まり、お祈りし、聖書の御言に従うこと、聖書の御言によって生きていることを、初めて感じました。

数日経ち、正野兄から職場の皆に謝った方がいいと、一緒に祈りしていただき、その機会を与えられました。

謝るために話をしている時、なかなか自分の気持を伝え

られない、自分の存在自体が禍いであること、自分を捨てられないでいました。心の中で主よ、主よとお祈りしてました。すると、十字架が見えたのです。実際見たこともないものですが、見えたのです。涙が溢れてきました。心が平安になりました。それから職場の皆さん一人ひとりに謝り、許していただきました。

自分が一生懸命お祈りしていると思っっている間は不安がなくならない、それが、いつのまにか自分で意識していない間に、フツと不安がなくなり平安が訪れます、自分で戦ったという意識が全くないのです。どうして、こういう気持ちになったのか、考えても、考えても分かりません。先に書きましたイエス・キリストの十字架について頭で納得していなかったことが、このような体験によって恵んでいただきました。私に初めての大試練が、大きな大きな恵となりました。

これからは、自分で答えを出すと後悔するので、祈って聖書を読んで、小さき御声を聞き分けて行きたいと思えます。

「きよう、み声を聞いたなら、神にそむいた時のように、あなたがたの心を、かたくなにはいけない」。

(ヘブル三・十五)

## 重箱の隅

首 藤 正(前田)

最近気づいたのだが、幼児時代のサムエルは、エリに呼ばれたと勘違いして、一度目は「走って行った」のに、二度目と三度目はただ、「行った」としか書かれていないのは、なぜだろうか、ということだ。「走って」ないとしたら、「歩いて」行ったことになる。

はじめは「走り」、次は「歩き」、その次は「ゆっくり歩き」、ということだったのかもしれない。意地悪かもしれないが、そういう想像が湧くのである。一度に全速力で駆けて行ったのに、「私は呼ばないよ」と言われたことが、無意識のうちに心に引っ掛かって、ブレーキとなったのではあるまいか。

おかしいなあと、どこかで思う心が走らせなかったと言える。三度目などは、実際にも、首をかしげながら行ったのかもしれない。

自分だったらどうしただろうかと、矛先を自分に向ければ、勿論のこと、一回目の間違いに懲りて、てっきり「空耳」と決め込み、二度と行かなかったであろうと思える。それを考え

ると、早さの違いはあっても、実際には、呼び主としか思えない人の元へ足を運んだサムエルは、すごいとしか言いようがない。

後年、身の危険を冒して、神様に命じられたとおり、ダビデに次の王任職の油を注いだ服従の萌芽を、ここに見る気がする。

だけれど、と私は、へそ曲がりのようだが、従い方の違いを心のうちに探りたいのである。「全く従うことをようしないサウルは、これを見捨てた。私の心に適う若者のダビデを次の王に決めたから、これに油を注げ」と言われたとき、サムエルが心配したのは、現役のサウル王を差し置いてそんな事をすれば、身が危ない。まかり間違えば、反逆罪に問われて首が飛ぶ。これは何とか策を講じなくては、ということだったのだろう。実際にも、燔祭挙行を名目に、目的をカモフラージュして、身の保全と油注ぎの両者を旨くやりおさせた。賢いと言えば賢いが、身の危険を顧みずに、神命に従ったとは言えなさそうなのである。

ここで、自分だったらどうするかと、もう一度胸に手を当てて考えてみると、これはもう格好の先輩がいらして、その真似をするに違いない。ニネベに行けと言われて、めっそもありませんと逃げて行ったあのヨナである。尻に帆を掛け

て逐電した姿が、すぐ思い浮かぶのである。それを思うと、さすが両者を両立させたサムエルは、「大人」だったと感心するほかない。

だけれど、神様のご評価はどうだったのだろうか、全面的服従と見做してくださったのだろうか、その所が気になるのである。サムエルの晩年、息子たちが利に走って汚職のスクヤンダルを起こし、晩節を汚した事とどこか繋がっていないければ幸い、と言うのは少し酷に過ぎるのだろうか。

隅々まで限なく明るいと云うのは、言うは易く、行いは難しい事なんだろうか、我らの主を除いては。



## 気になる木

尼 田 隆 己 (前田)

この三、四年尺岳、福智山を中心に登山を楽しんでいる者です。本当に山は空気はいいし、物事を深く考えることのできる場所です。モーセが山に導かれ神の声を聞いたのは本当に意味のあることだと思えます。そのほか大切なときには山に導かれる話や、イエス様もよく人を避けて神と対話したことが記されています。

モーセなどと比べる気はありませんが、私の場合讚美歌なら讚美歌でその日一つか二つの讚美歌が思い浮かびますと、一日中その讚美歌が出てきます。なかなかほかの讚美歌が出てきません。聖書の御言葉でもそうです。一つの御言葉が思い浮かびますと、あまりほかの御言葉は思い出せません。その御言葉の周辺でいろいろなことを考えます。だから深くなっていくのだと思います。登山のきつさや手元に聖書や何も無いこともあると思いますが、それはそれで楽しいことです。さて、今回は尺岳の周辺で「気になる木」について紹介しようと思います。それはかたちが大変ユーモラスでそこを通

るたびに笑ってしまいう木です。



この木は尺岳から福智山に向かって15分くらい行った所にある木で、その昔そばの木に噛み付いたと思われるもので、山でもし烈な闘いがあっていることだと思われま



この松の木も三本松とか三兄弟というか、根元は一つにつながっています。



この木も関節のような  
木でこんなたくましい  
関節があつたらいいな  
と思うような木です。

これは岩ですが、登山口  
から福智山に向かう道を  
30分くらい行った所（山  
瀬越）から鱒淵ダムに20  
分くらい下りた所にある  
奇岩で、多くの奇岩は私  
はあれに見える、僕は違  
うものに見えるとばらば  
らですが、これは鯨にし  
か見えないという岩です。

## いきなり

首 藤 正（前田）

私の悩みの種は、ひとが怖いことだった。どうかすると、  
子供も怖く感じられた。

人に対すると、どうしても腰が引けるのである。自分から  
進んで、人に近づけなかった。いつも逃げ腰なのだ。そうい  
う私に愛想を尽かして、去っていった人は数え切れない。離  
れてくれるとその都度、ホッとした。そうであるのに、それ  
で良いとはどうしても思えず、人の世にそういうことでは通  
用しないことは、いくら私でも分かるのである。

十代の後半から、私なりに矯正に乗り出し、ほとんど手当  
たり次第にあれこれ試みた。断食、修養道場、心理学、生長  
の家……、もう思い出せないほどである。

はたち過ぎ、たまたま看板が目についた、「前田教会」にフ  
ラフラ入って行ったのも、困り果てた挙句の事だった。

印象は、「びっくり」の一言に尽きた。

異常に空気が熱いのである。牧師先生も熱いし、信者の人



達も劣らず熱かった。とりわけ、祈りの言葉の威勢のいいには驚いた。何も見えない相手に向って、見えているみたいに、早口に一気にまくし立てるのには、聞いててこちらの頭がおかしくなりそうだった。

入れ代わり立ち代わり、ひきも切らずそれが続いてゆく。

この人達はどうした種類の人のグループなんだろうと、何か別世界に迷い込んだ気がした。しかし、牧師先生のお話を聞いてると、間違いなく正気なことは分かるけれど、迂遠(うえん：回り遠い)で、自分とは無関係に思えた。

これは来る所を間違えた、自分には役に立たないと一瞬思わないではなかったけれども、周りに座っている人達があまりにも真剣で、今まで見たこともない雰囲気(まどとつて)があるので、何か知らないがもう一度来てみようと思ひ直した。それがきっかけで、再来が再再来となり、形の上では求道者として通会するようになったのであった。

とは言っても、すんなりとは行かなかつたのである。

私は生まれつき疑い深く、用心深かつたせいで、すぐには信じないし、為にする何かがあきつとあるに違いないと疑つてかかる、根っからの性分があつた。

救われたのは山々だが、怖がる性分から救われたので

あつて、罪という何だか得体の知れないものからではない。罪という観念はなくもがなの、余計な事のように思えた。造り主という不可視の存在を無視する事が罪と言われたつて、それは無理難題と言うものだと言つて、なかなか受け入れられなかつた。

そのうち、すでに信者となつている年上の方の証を聞く機会があつた。求道時代に、裏山でかねて悩んでいた事を神様に報告し、善処をお願いする祈りを、「イエス・キリストの名で」したところ、いつの間にか解消してしまつた、という耳寄りな話に、私は後先も考えずに飛び付いたのである。

「神を試みてはいけない」けれども、「イエス・キリストの名」を信じて祈れば、「イエス・キリストの名のゆえに」聞いてくださるといふ構図のところの、「信じて」といふ肝腎な点が曖昧なまま、私は試み出したのである。

結論を言うと、繰り返しに疲れ果てた。忍耐にも限度があつた。これは駄目だ、私には当てはまらないと諦めてしまい、次に思いついたのが、罪の問題であつた。

十戒を読もうと、山上の垂訓に接しようと、自分が神様に背いて敵対しているとの実感は少しも湧かず、罪からの救済の必要も切実とならぬのなら、ひとつそうなるようにしてください、と祈つたのである。むろん「敵は本能寺にあり」で、

最終目的は「人を怖がる性分からの脱却」であった。

これも結論から言うと、「そうやすやすと問屋は卸してくれなかった」のである。今度は芯から困り果てて、省みて、それまでの無益な歩みを総括して、言い古された諺を自分に言っ

て聞かせた、「縁なき衆生は、度し難し」。

そして、名実共に教会を後にしたのだった。それから十年以上、聖書は捨てはしなかったが、他の蔵書の間、背文字を見せるのみで、一度も取り出されることはなかった。

家庭でも、社会でも、自分ひとりの面倒を見るだけで事足りた四十年は、人の分も視野に入れる必要に迫られたとき、あえなく覆った。

ひどい神経症に罹り、いつときもジツとしておれず、その辺をやみくもに歩き回らずには生きた心地もしない日が続いた。溺れる者は藁をも掴むと言うが、たまたまその藁が、以前手離した牧師先生だったのが幸いだった。

藁先生にすがりつき、這い上がった先は元の教会で、全身濡れしよぼたれた、見る影もない人間を、白い眼(目)で見る人は誰もいなかった。

日を経るほどに、神経症は薄らいでいった。引き換えて、

目立って信仰心が育ったわけでは、残念がらなかった。唯ひとつ、焦りが消えていったことだけは、救いと言えば救いだったのかもしれない。

五十の坂を越え、六十の峠を目前にして、定年で浮世の戦列から離脱し、文字通り「隠れ里」の隠棲(いんせい)：世を逃れて閑居する)に甘んずる隠者の暮らしが待っていた。

欲も得もない十年が瞬く間に過ぎて、古希と言われる歳に相前後して、思いがけなくも孫が生まれ始め、続々と続いた。ご多分に漏れず、共稼ぎの必要から子供達の依頼を受けて、日中の保育で孫達と共存の暮らしが、老後を一変させてしまった。

一口に言うと、「泣く子と地頭には勝てぬ」のである。年寄りの体力や都合などお構いなしに、幼児達は要求してくるし、抗(あらが)つても無駄で、実りのない消耗に終わることがすぐ分かった。掲げたモットーは「無抵抗主義」。そと目には、お孫様にお仕える日々となった。例えて恐れ多いが、「十字架」を「自分の都合の棚上げ」と読み替えて、「十字架を負うて」お子様の意向に従う毎日だ、と感じている始末。自分の都合を度外視して従うことの何たるかを、身に即して学ばせられているようなものであった。

そんなわけで、孫にせがまれて家の近くを散歩していると、

通りがかりの人によく声を掛けられる。「あら、可愛いお孫さんね」と言つて、お年寄りには以前の孫の面倒を見た体験を懐かしがるし、現役の若いお母さん達は同志の感じで心を開くし、そんなこんなで今まですれ違うだけだったいろいろな人達と、いつの間にか立ち話から、どうかすると話し込んだりするようになつて行つた。

性格のことで、最初に祈つた時から五十年以上経つてはいるのだが、気がついてみると、人を怖がる心や人と話せない物怖じは、どこかへ行つてしまつたし、うまく言えないが、何事につけ、「イエス様がよいようになさつてください。また、それを私も良いと受け取らせてください」という願いが生まれ、生涯それで通したいと祈つていたのである。

まだ終わるかどうか知るところではないが、  
「終わりよければ、全て良し」

という諺もあながち捨てたものではないなど、つくづく思う昨日、今日なのである。

それにつけても、思い出されるのは、故榎本利三郎先生特愛の次の聖句である。

「ひとたび我に來たる者は、我、必ずこれを捨てじ」

(ヨハネ六・三七 元訳)

## 記念会

緒 方 と み 子 (大濠)

「あなたがたは、さきの事を思い出してはならない、また、いにしえのことを考えてはならない。」(イザヤ書四三・十八)

時の流れは、時には速く、時には遅く感じるものです。

私は幼い時から口癖のように、「母の五十回忌は、私がするよ」と言つてました。ところが、神様のご計画は全く違つていて、父の召天三十年記念が一緒だったので。

神様がバラバラにして散らした兄弟、姉達を集めることは大変です。それに数年前に仲違いしたままの姉達を、どのような言葉で説得したらよいものかと、思い悩んでいました。

そんな頃でした。店の仕事の疲労とで、洋服店を辞めることになりました。そして寝込んでいましたら、四国の松山に住んでいる弟が急に電話してきて、「手術をするので、来て欲しい」と言います。私はとんでもない事が起つたと思いましたが、しかし、松山に一番近いのは私ですから、祈つて出かけるこ

とにしました。

十一月十一日の福岡大濠公園教会での礼拝に引き続き、家族会で弟の病気の事を聞いていただき、榎本和義先生に、「神様の御用ですよ」と言われて、皆様方の篤き祈りに守られ、その夜のフェリーで出かけることになり、大変感謝いたしました。

「あなたの家に住み、常にあなたをほめたたえる人は

さいわいです」(詩篇八四・四)

早朝、まだ真つ暗な頃に松山に着く。この「フェリーさんふらわあ」の船中はとても暖かく、寝心地が良いと、船中で旅をされている方が教えてくれました。ところが、健康を崩していた私にとつては、とても荷が重く感じていました。

港から二十分ばかりタクシーに乗り、弟の入院している病院に行きましたら、玄関先で瘦せた弟が迎えてくれ、病室に通されました。

弟は昼から手術する予定でしたが、午前中手術の方が肥満だったために長くかかり、弟の手術は午後三時から始まりました。病室で待つように言われて待っていました。だんだん日は沈むし、待つ時の長いこと。

やがて、主治医が「弟さんは痩せていたから、とても短い時間で済みました。血が止まれば問題ないのですが、明日いっ

ぱいまで松山にいてください。下の階で手術の説明をします」と言つて、看護師に何やら話をしていました。

私が下の階の部屋に行くと、すでに切り取られた臓物が透明な箱に並べられていました。私が見たり、見なかったりしている、若い主治医は「お姉さん、しっかり見ていてください。後で切り方が悪いと言われる家族の方がいますから」ときつく言われて、主治医はデータに基づいた命の説明を長々と私にしました。

それが終わつて、私は病院の近くのビジネスホテルを予約していたので、そこで一泊させていただき、遠方に行けば自分の体が危ういので、気晴らしに「松山城」や「伊予かすり会館」などを見て回り、晴天続きの旅に感謝いたしました。

三泊四日の旅を終え、ホッとする間もなく、久留米で私を待つていたかのように、今度は洋裁仲間だった友達が、「二つの手術をするので、私怖いから付いて来てー」と言うではありませんか。疲れの取れていない私でしたが、祈りながら、今度は久留米の大きな病院へ行くことになりました。そして感謝な事に、心臓の方は異常がなく、新年を迎えてからする手術を待つ身となったそうです。

本当に、自分の考え方で、あれもこれとも思っていた私に、神様が与えてくださった事を、神様の道筋で通すことの大切

さを、教えられました。

そして、戸畑教会で父の記念会をと祈っておりましたので、伊規須先生にお願いして、していただきました。父を知っている方も少なくなりつつありますが、伊規須先生が覚えていて父の思い出を話してください、その事を祈っていましたので、本当に感謝でした。

「見よ、わたしは新しいことをなす。

やがてそれは起る、

あなたがたは知らないのか。

わたしは荒野に道を設け、

さばくに川を流れさせる。」

(イザヤ書四三・十九)



## スペイン旅行感想記

正野 眞 宏 (前田)

〈はじめに〉

私達夫婦は、別に決めたわけではないのだが、結果的に毎年海外旅行をしてきており、今年も二月十三日から二十日まで、その機会を得た。

どうしてそんな大きな犠牲(体力と金力と余暇力)を払って、そんな遠い所へ出かけるのか、それだけの価値があるのかと問われても、行ってみたいから行く程度のもので、特別な目的があるわけでもない。

強いて挙げるならば、私が現職時代にカナダのバンクーバーに視察に行く機会があり、ついでにカナディアンロッキーの雄大な山脈を見て感動し、神様は世界にこんな素晴らしいものを造っておられる、これは見なければ損だと思ったことから始まる。自然ばかりではない。世界には、バベルの塔が壊されて以来、多種多様な人種が言語・文化を持って生活している。神様はその国とそこに住む人達の歴史を導いてこられた。私達は日本という国に住み、日本の文化の中に生活し

ており、それが当り前で全部だと思いやすが、神様は世界中に様々な文化を許して置いていらつしやる。それらの異文化にふれる事は有益である、と同時に、自分の生き方を見直す機会ともなる、そんな事を考えているうちにいつの間にか十カ国以上となつてしまつた。

今回、なぜスペインにしたか。それは世界で一番世界遺産が多い国と聞いたからである。

スペインは遠い国である。今回は名古屋中部国際空港からフィンランドのヘルシンキで乗り継ぎ、バルセロナまで行く。総飛行時間は、音速より早い時速千キロ近い速度で飛んでも、十五時間かかる。それでも地球の半分も行つていないのである。つくづく地球は大きいと思う。

もう一つ、長い飛行中の退屈しのぎに考えたことは、ヘルシンキまではほぼ地球を西に横切り、太陽を追っかける形になる。ところが、である。ヘルシンキの時差から考えると、二時間も飛行機の方が遅い。つまり、飛行機は地球の自転の速さに追いつかないということだ。とすれば、私がピョンと飛び上がり、じつと動かないで居れば、地球の方が回転して、飛行機よりも速く、しかもタダでヘルシンキに着く、ということになる。そんな機械を發明すれば、大儲けだな、そんな他愛もないことを考えた。

それにしても、地球は二四時間で一周するので、猛烈なスピードで廻つてゐることになる。地球の表面にいる私達は、良くぞ振り落とされないものだと思う。自転の遠心力と引力との微妙なバランスで守られているということである。すべて神様のご計画と業であることを思うと、その偉大さに圧倒される。

さて、行程の概要は、まずバルセロナに入り、ガウディで有名な聖家族教会やグエル公園、それにピカソ美術館、二日目はバレンシアオレンジで有名なバレンシア、三日目は、グラナダでイスラム教徒最後の拠点となつたアルハンブラ宮殿、白い村のミハスを経由して、四日目、コルドバでフラメンコの踊りを見ながらの食事、メスキータ（イスラムのモスクをキリスト教会に転用）を見物し、マドリッドへ行く途中で、ドンキホーテで有名なラマンチャの白い風車を見学、五日目はスペイン絵画の殿堂（グレコ、ベラスケス、裸のマヤで有名なゴヤ等）プラド美術館、ピカソのゲルニカを展示するソフィア王妃芸術センター、王宮広場等を見学、午後はローマ時代の首都であり、そのままを残すトレドを見学したが、とにかく広い国土を欲張りに見るため、午前中観光し、午後は四々五時間かけて次の町に移動するという強行軍であつた。

## 〈印象その一 国民性〉

スペインは日本の一・三倍の国土に、三分の一の人口が住んでおり、実にゆったりとした感じのする国である。従って、時間的にも(我々から見れば)ルーズで、昼食は二時頃(レストランはその頃しか開かない)、それが終わるとほとんど仕事をしないそうだ。夕食は十時か十一時頃になるらしく、電車の時刻表も概ねその頃に着くという認識らしい。駅員に到着時刻を聞くと、それは着いた時だと答えたという。どうも、日本人のように何分何秒まではつきりしないと承知しないという考えを離れないと、ここでは生きて行けない。天気予報もあまり当たらないそうで、お陰で雨の予報で心配していたのに、快晴に恵まれ、感謝であった。

このような鷹揚な国民性は、地中海気候の影響があるのかもしれない。緯度は日本とあまり変わらないのに、冬のこの時期でも暖かいし、夏は四五度を超える日が多く、一年のうち雨が降るのが五十日足らずというお国柄である(地中海の向こうはアフリカ大陸である)。山という山には木が生えていない。ほとんどが禿山である。土地は赤茶けて、とても肥沃な土地とは思えない。そのため、バスで走っても走っても、乾燥に強いオリブ畑が続く(バレンシア地方だけはオレング畑が続く)。それは金太郎飴のように、同じ景色が飽くほ

ど続くのである。野菜畑は一度も見なかった。一体どこで作っているのだろうか(後で聞いたが、北部地方で作れるとか)。

考えてみると、日本ほど自然環境に恵まれた国はない。砂漠の民であるイスラム教徒がここを支配したとき、優れた灌漑技術を導入し、オリブ栽培を奨励したとの事。スペインは世界最大のオリブ栽培国なのだ。

## 〈印象その二 イスラム教からの脱却〉

ほとんどのヨーロッパの国がそうであるように、スペインも他国から支配された歴史を持っている。ローマ帝国に始まり(この時の首都がトレド)、ローマ衰退後は西ゴート族の侵略を受け、八世紀から八百年の長きにわたって、イスラム教徒の支配に服した。

イザベル女王の時に、キリスト教勢力が団結してイスラム勢力を駆逐し、キリスト教国を回復した。この事が、この国の一番大きな出来事だったのではないかと思う。これまでの閉鎖的なイスラムから、外に向って開放的・積極的姿勢へと変わり、女王がスポンサーとなったコロンブスの新大陸発見が契機となって、大航海時代へと突入し、外国航路によって、スペインは未曾有の繁栄と発展を遂げるのである。

イスラムとの戦いは、単なる勢力争いではなく、国づくり

の戦いだっただと思う。もしスペインがイスラム教国のままだったら、今のEUという欧州共同体もなかっただろうし、世界情勢にも影響があつたに違いない。いろんな国へ行つてみて感じるのは、文化や宗教が国を造るということである。どういう文化・宗教を持つかによつて、その国の有り様と歴史が変わってくる。例えば、日本は仏教の影響を強く受けた国づくりを進めたが、もしキリスト教主義の国家が成立していたら、日本の歴史は大きく変わったと思う。

今日の日本を見るに、文化の多様化と称しているが、しっかりした文化・宗教を持たないため、政治も教育界も混乱し、右往左往している。国家の基盤をどこに置くのか、ここがはつきりしないと、時代と共に動かされてゆく。

これは国家だけでなく、個人においても同じだと思った。私自身、この世の慣わしに従い、おのが腹を神として、おの望みなきは、文字通り「神なくキリストなく、この世にあつて望みなき者」で、何をすることも自信がなく、内向的で暗く、希望もなかった。そんな私が、神様を知つてから変わった。何よりも希望を持ち、前向きになった。何があつても逃げなくなった。困難があつても神様を信じて、前に進む。すると、道が開けることが分つた。人生が楽しくなった。私が強くなったのではない。神様に従うという信仰(文化)を持っただけなのだ。

動かない岩の上に家を建てるのが、どんなに大切なことなのかを、考えさせられた。

### 〈印象その三〇神の大いなること〉

先にもふれたが、スペインは決して豊かな国ではない。土地も痩せて耕作は限られ、山にはほとんど木も生えていない。気候は暑く、雨も少ない。日本と比較して、厳しい気候風土の中と思うが、神様が知恵を与えて、それぞれ生活している様子を見るのである。

スペインだけでなく、不毛の砂漠に住む人や山岳地の人はどうやって暮らしているのだろうかと心配してしまうが、神様は彼らを養つてくださっている。神様は実に豊かで、心の広い御方なのである。

私達は自分のレベルで、あるいは日本的な狭い感覚で神を量ろうとするが、地球規模で考えても、その大きさは計り知れない。スペインの広い国土を走つていても、まだ大部分は未開発である。飛行機でシベリヤ原野の一万メートルの上空を飛ぶが、広い大地の所々に人の集落が小さく見えるだけで(見よ、もろもろの国民は、おけの一しづくのように、はかりの上のちりのように思われる(イザヤ四十五)を思い起こす)、人間が利用しているのは、ほんの一部分に過ぎず、





ガウディの聖家族教会(まだ建築中)

人間の小ささと神の大きいなる事を実感するのである。これが宇宙規模になると、どうなるのだろうか。これらを創造された神の偉大さは、想像を絶するものなのだ。

私達はついつい神様を小さく、小さく見てしまい、目先の問題が解決するのかと一喜一憂するが、私達の信じる神様が如何に大いなる御方であるか、また「神の力強い活動によって働く力が、わたしたち信じる者にとっていかに絶大なものであるかを」(エペソ一・十九)、知らなければならぬと思う。



ドンキホーテで有名な風車群

## 八幡前田教会年末感謝会

二〇〇七年(平成十九年)十二月二日

(讚美歌五二九番を賛美の後、証に入る)

**林一孝兄** 今年も神様から恵みを戴きましたが、その中で一番大きかったのが、新しい住まいが与えられたことです。自動車修理の店を開く時も、道かどうか分かりませんでした。祈っているうちに、神様がブーツと道を開いてくださったのですが、今回もそれと同じような体験をさせていただけましたので、お証します。

私達夫婦は二人とも日中は店に出ますので、家は寝るだけで、正直あの家賃はもったいないと思っていました。友人も市営住宅に入っていましたから、最初から当たるとは思いませんでした。とにかく申し込みだけでもしようと思いましたが、とにかく申し込みだけでもしようと思資料を取り寄せました。私達は店を持っていますから、どうしても店から近い所でないかと都合が悪いものから、近い所はどこだろう、それに駐車場がないと困るので、といろいろ探してみました。車社会以前にできた古い団地では駐車場がないのが多いのですが、なぜか清納団地の一棟

だけに駐車場があるのです。ところが申込み時に清納団地希望とは書いても、駐車場の何棟とは書けないのです。とにかく応募だけはしよう、もし他の団地だったら断ろう(もし断ったら、次の機会には拒否されることも知っていました)ということでも申し込みました。

後は家内と二人で祈っていましたら、抽選があつて幹旋の順番が二番目ということでした。その時は、応募も多から、まあ最初はこんなものかと思ひ、その事は忘れていました。それから一ヶ月経った頃、郵便受けに何かが来ているとの事で見ると、幹旋の順番が来ました。幹旋住宅は清納二丁目九番と書いてありました。それは私達が希望していた棟だったので。私は嬉しくもありましたが、なんだか恐くなりました。自分の都合ばかりで、当たるはずもないと思つていたのが、神様はすごい事をしてくださつた、その力の偉大さを思わざるを得ませんでした。

それでこれは神様が導いてくださったと思ひ、すぐに申し込みをして、入ることになったのです。

しかし、果たして駐車場が空いているかと心配して聞いてみましたら、空いているよと言うのです。これまたすごいことだと思ひました。それですぐ引越ししまして、用意する物もありましたが、一つ一つ与えられて、ここまでや

つて来ることができました。

家賃も前の所より四分の一ぐらい安くなって、おまけに部屋も一つ増えて、本当に素晴らしいなど、二人で感謝しています。前の所は三号線沿いで夜もうるさく、すぐにすずけて埃が多かったのですが、今度は山沿いのために埃も少なく、静かで、テレビの音量も半分ぐらいで、こんなに違うのかなと思いました。二人で、ずっと感謝しています。

**和義先生** 「願いにいたく勝れることを成し給う方」とありますが、なかなか希望通りにならない状況の中で、ご本人達が願っているその場所へ置いてくださる。また必要な駐車場も、車の仕事をしていますからね、駐車場がなければ困りますが、願ったり適ったり、神様が一番良い事をしてくだされた。まことに幸いな神様からの幸いを戴いたと感謝します。

**石田秀子姉** 私は十一月の末日に、十一年と二ヶ月させていただいたヘルパーを無事終えまして、心から感謝しております。最初はどんなことになるだろうかと心配しておりますが、これは神様から与えられた仕事として、この手の業を通して、御心にお従いしますということで始めさせていただきました。

よそ様の家庭に入り込んでの仕事ですから、まあ受け入

れてくださる家庭も大変だったと思います。入る私達の方も、快く受け入れてくれるだろうか、どんな性格の人だろうか、馴染んで行けるだろうかと不安を持ちながら行くのです。そして一軒一軒、何年間かをお手伝いさせていたのですが、私心がけたことは、人ではなく、神様が見てくださっているのだから、人の批判とか評判は気にせず、影日向なくしようということでした。

それから十一年間、三十何軒かの方達の家に入れていただいて、活動させていただきました。そして今、この仕事をさせていだいて本当に良かった、主の御用としてすることができたことが、すごく感謝でした。また、行く方々（癖のある方もおられました）皆さん受け入れてくださって、本当に楽しく活動できましたし、神様がこの方に行かせてくださったのだと思って、良い方に巡り会えたと感謝で一杯です。

やはり厳しい方の所では、泣きはしませんでした。本当に歯がゆいと思つて、「神様、歯がゆいです」と神様と格闘するような、めちやくちやな祈りをしたりして、心を鎮めさせていただきながら、活動を続けさせていただきました。きついなあという時には、「だから愛する兄弟達よ、ますます励んで、主の業に励みなさい。主にあつては、あ

なた方の労苦は無駄になることはない」という励ましの御言や、「神はあなたがたをかえりみて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい」という御言を戴きながら、この十一年間させていただきました。

それに、健康が支えられたことも感謝です。しかし、夏ごろから足を痛めてしまい、膝を悪くして部屋の掃除も困難になって、じぶんで立ち上がれなくなってしまいました。もう駄目かなあと思い、終わる事を祈っていました。十月の礼拝で、「汝は我に従え」という御言を戴いた時に、「これであなたの御用も済んだんだよ」と神様がおっしゃってくださったように思えましたので、早速月曜日に、会社に十一月に終わらせていただきたいので、後任の方をよろしくお願いし出すと申し出ました。一応引き止めては下さったのですが、とても続けられる状態ではありませんでしたし、皆さんにご迷惑をお掛けしてもいけないので、辞めさせていただきました。本来定年は六五歳なのですけれども、お元氣なれば是非との事で、一年延長させていただいてたわけです。

それと、私は母と父を早く亡くしましたので、老いを看ることはなかったのですが、日々老いて行かれる方の姿を

見させていただいて、この御用は私の古い支度だったと思いい、有り難い御用をさせていただいたなど、心から感謝しています。

それとも一つ、私達は救われて神様と共に歩ませていただいていることを思うとき、神様を知らないで生きていく方との大きなギャップと言うか、生きる価値と言うか、私達と全く違う所をはつきり見せていただいで、これからどういう思いで生きて行かれるのだろうかと気の毒に思うのですけれども、一方で主を恐れて過ごしておられる方々の輝いた生き様を見ると、何と素晴らしいことか、こんな素晴らしい生涯に入れられたことが、何と感謝なことか、何というすごい嗣業に入れていただいたか、日々それを思わされ、私は生きた勉強をさせていただいたと感謝しています。

これで一つの区切りをつけさせていただきましたが、これから新しい御用が与えられると思って、「あなたがたに對していただいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである。」(エレミヤ二九・十一)の御言を握り締めています。また神様が新しい道を開かれる、そういう大いな

る望みを持って、また自分の老い支度と共に、「われらにおのが目を数えることを教えて、知恵の心を得させてください」、これが私の切なる祈りです。いつまで生かされるか分かりませんが、魂が死ぬまで整えられて、主から「善かつ忠なる僕」として義の冠を戴けるようにと願っています。

私が活動している間、一人も亡くなる方がありませんでした。これも感謝でした。仕事でも、何をしたら良いでしょうかと、一つひとつ祈りながら、させていただきましたが、出たり引つ込んだり、迷惑をかけたことも沢山あったと思います。それらもご利用の皆様には、「あんたのすることだから、いいよ」と許された事も感謝でした。これも皆、神様のなさった業でして、私は何もできなかったのです。主をご存知ですから、憐れんでさせてくださった。そう言うほかありません。

**和義先生** ヘルパーという仕事は、相手が相手だけに、大変だなあと 생각합니다。それを十一年間させていただいたという事は、まことに神様の御業と言うほかありません。こうして一つの事が終わって、神様は次なる使命を備えてくださるに違いありません。またこの地上にある限り、主が必要とされる事が有りだと思います。祈りつつ求めてい

らっしゃるように願っています。

**内田知代姉** この秋以来、心を揺さぶられる事がありました。私は二〇〇三年に受洗したのですけれど、その時はまだ、主を手ざわるように知るとか、十字架の奥義とか、一応は分かったつもりだったと思いますが、以来、その事が心の中になりました。

この秋に、職場でほとんど私のわがままが出て、見るもの聞くもの全て、誰が悪い、彼が悪いと人のせいばかりになって、人間関係でひと騒動が起りました。心の中にモヤモヤがあつて、一日有給休暇をとつてお祈りしたのですが、その時は心は平安になりますが、またすぐモヤモヤが起るといった状態で、安心することはありませんでした。

その後も祈っていたのですが、どうにもならなくて、職場の上司でもある正野兄に思いをメールにして伝え、相談しました。その返事が来た時に、すべての禍は外にあるのではなく、私の存在、私の思い、自分にあることを突きつけられて、そこでまたお祈りしました。良く分かりませんので、讚美歌を歌ったり、聖書を読んだりして行くうちに、どうしてそうなったか分かりませんが心は平安が与えられ、職場の人に謝ろうという思いが出てきました。(その時の詳しいことは、「ぶどうの木」に寄稿しましたので、

ご覧ください。)

今回、私が揺さぶられたのは、イエス様の十字架のことが分からなかったのですが、祈って行く内に、イエス様が十字架に掛かれた所は見ていませんけれども、それが見えまして、スツとしました。和義先生にメールしたときも、「あなたは戦いに勝利しましたね」という言葉がありました。私が、私自身は何ひとつ戦ってはいないのに、何でこんな勝利を得たのかなあとという思いでした。

私がこれまで悩んでいた十字架について、解決が与えられたという思いです。

本日、感謝会があるということで、この他に何か感謝があるかなあと祈っていたのですが、最近祈ることが楽しくなって、自分では何もできないということが分かったので、祈るほかないのですが、どうなるかと言うことより、祈ってお任せできるようになったことに気づきましたし、また人間関係の問題の時に、私は正野兄に個人的に訴えておりましたが、正野兄は私の悪い所を一言も言わず、信仰の話をして祈ってくれました。この事も感謝ですし、さらに私が受洗するために教会を出発するときに、栄子先生が「今日、二人の聖徒が私達の群れに加わります」と祈ってくださったのです。その時はピンと来なかったのですが、私が

前田教会の群れに入れさせていただいたこと、そして主に  
ある皆さんが、(私のことを良く知らなくても)私のために  
祈ってくださっていることを覚え、心から感謝しました。

今回の事でいろんな感謝があるのですけれども、目に見  
えることで不平不満ばかりを言っていた私でしたが、目に見  
えることではなく、ただ祈って行く時、主が御業を私に  
現してくださいって、すごい恵まれた後半の一年でした。

まだまだ赤ん坊のような私です。どうぞ祈ってください。

**和義先生** 諸悪の根源は自分なんだということですね。自分  
は何かできると思うから、人を批判し、人のすることがチ  
カチカ目に付くわけで、自分は何もできない、自我に死ぬ  
ということが十字架そのものですね。なかなか自分を捨て  
るということはできませんが、イエス様が私のために十字  
架に死んでくださった、それは私だと信じるとき、パウロ  
が言っているように、「我、キリストと共に十字架につけ  
られた」、私は死んだ者だと、この一点に徹底的にするこ  
と以外にない。これが救いですね。

内田さんにとって、ここが信仰の出発点、またそれが完  
成でもあるのですから、まだまだ戦いがあると思います。が、  
神様は必ず乗り越えさせてくださる。なぜなら、主は「わ  
たしはすでに世に勝っている」と言われる。内田さんが戦

うのではない。主が勝ってくださいなさっているのですから、この御方に従う以外にないわけです。

### 正野眞宏兄

今、内田さんが自分の事を語りましたので、私から少し補足したいと思います。私自身、内田さんの事でもいい経験をさせていただいたと思っております。

以前から状況は聞いていたわけですけど、内田さんからメールを受けまして、私がどうこうできる事ではありませんし、祈るほかないわけです。メールを見て、どのように返事をすればよいか分かりません。いわば神様の前に立っている魂を、どう取り扱うというか、初めての経験ですから、一般的な話として日曜学校の生徒に話すのであれば、それは話せません。しかし、現実悩んでいる魂に対し、どう対処すればよいか、経験がありません。しかし、返事をしなければなりませんから、とにかく祈って、厳しいとは思いましたが、導かれるまま諸悪の根源は私にあるという、私自身の共通の問題でもありましたから、その事を率直に書かせていただきました。その事を通して御霊が内田さんの内に働いて、悔い改めに導かれたということは、私にとりましても大きなことでしたし、私の何かでは決してありません。御霊が私にも、内田さんにも働いてくださったというほかありません。

私は法人の理事長という立場でありますから、問題が起されれば、組織の最高責任者として白い黒いはつきりさせて公正に裁かなければならない。場合によっては辞めさせるということもしなければなりません。いわば神様が私達を裁く立場と救いたい立場と両方の立場に立たれて苦しまれたように（それでイエス様を遣わされたのですが）、私も内田さんを裁かなければならない立場と、一方では同じ主にある兄弟姉妹として、何とかこの事によって信仰に立つてもらいたいという気持があるわけです。

そういう苦しい立場にありましたが、その中で学んだ事は、信じるということでした。神様を信じて、内田さんを救ってくださいという信仰と忍耐です。裁かなければならない、しかし神様を信じて待つ。それは信仰の戦いでもあります。それで御言が与えられて祈る。それこそ、私が信じなければ、誰が信じるのだという思いでした。甘くすれば、えこひいきではないかと言うことにもなります。状態は変わりませんが、神様を信じ、内田さんを信じて行こうと心を定めました。そうしたところ、神様がこういう結果を与えてくださった。神様のなさることは、本当に素晴らしい。神様がこんな経験をさせていただいて、感謝のほかはありません。

さて、私にとつての一年の感謝ですが、まとめましたら十三ありました。その中で最大のものは、結婚四十周年を迎えたということです。子供達にも祝ってもらいましたが、振り返って、神様がイスラエルの民を四十年間、愛をもつて導かれたことと重なり、何の力もない者を真実をもつて懇ろに導いてくださったことを感謝しています。

**高木ツル工姉** 今年与えていただいた御言は、イザヤ書五五章三節「耳を傾け、わたしにきて聞け。そうすれば、あなたがたは生きることができ」でした。私は絶えずこの御言に耳を傾け、自分の考えとか願ひではなく、神様の御心に従うことに心掛けたと、自分では思っております。その間の歩みは微々たるものですが、自分なりに神様は何を求めていらつしやるか、私に何をさせようとしておられるか、その事を祈ってきました。

家族のためにも祈っております。最近では三人の孫が礼拝も守らないようになっていますが、神様に日々祈って行けば、必ず立ち返らせてくださるといふ信仰を与えられまして、神様の憐れみに寄りすがって祈っております。

それから、今年一番の感謝は、八月に教会の横の土地が与えられた感謝会に出させていただいて、心から感謝しました。この事は、榎本利三郎先生と百合子先生が、隣の

西さんの土地について祈っておられました。礼拝中に大きな音を出されて困っていましたから、若い信徒達が交渉してきましたよかと言いましたら、先生は「祈って行きましよう。それが一番良い道ですよ」と諭してくださいだったので。それで私達も祈ってまいりましたが、途中で祈ることも忘れていました。ところが、先の感謝会で和義先生から、利三郎先生達の永年の祈りに答えて、神様が業を行なってくださいったことを聞かせていただき、その御業を感謝しました。

礼拝中に隣から製材の音がしますと、説教が聞こえないのです。それでも先生は祈って、その中で神様が何と仰るか聞いて行きましょうと仰って、私達も本当にそうだと思つていましたところ、神様が祈りに答えて、風呂桶の製造がなくなり、その後、別な店が入って音がしなくなつて、神様の御業を忘れてしまう状態でしたが、この度土地の取得ができ、整備工事と完成の感謝会に出させていだいて、本当に神様は約束して下さったことを（私達は忘れていましたが）、五十年後にこのように果たしてくださいと感謝させていただきました。それとともに、神様の前に悔い改める時が与えられました。

私は教会に来るたびに、整備された駐車場を見ては、神



様のご真実な御業を覚えて、感謝しております。

**文子先生** 度々両親の事をお証しておりますが、五月の初めに父の足の状態が悪くなったので、どこかに入院させて頂戴という事から騒動が始まりました。しかし、どこの病院も引き受けてくれなくて、こけて胸にひびが入ったのがきつかけで、牧山中央病院に入院させていただきましたが、病状が治まって二週間で出てくださいと言われて、金比羅にある診療所に入れていただきました。ところが、そこも三ヶ月で出なければならぬということで、主人とあちこちの有料老人ホームを探しました。けれども、どこも十人待ちとかという状態です。母は老人保健施設に入って、ここは一年間入れていただけるということですが、とにかく父母の居り場所を、神様作ってくださいというのが、毎日の祈りでした。

ところが不思議なように、戸畑のケアハウスに入ることができ、そして今、ホスピスに入れていただきました。

母もその後、私達の教会から二、三分の所にある特別老人ホームに入ることができたのですが、そこは寝た切りか痴呆の重症の方達ばかりで、母は歩けないだけで頭はしっかりしているものですから、そこを早く出たいと言って来ます。次を探すのも困難だったのですが、父がホスピスに

入ったことで、不思議なように栄光病院の有料老人ホームに入ることができまして、半年間の大嵐がやっと過ぎ去った感じがします。

それまで本当に、「わたしにきて聞け。そうすれば、あなたがたは生きることが出来る」という御言と、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」という御言を握って半年間、眠れない夜もありました。現実走り回っても、どこも受け入れてもらえないということもあって、ただただ神様に祈り求めて行った時に、一つひとつ道が開けて行きました。

一時期父が私に、「お前はわが家の大黒柱で、お前のような大黒柱の娘を持っている親は世の中にそういないぞ」とすごく褒めてくれたのですが、十一月に入って、主人に「その大黒柱にひびが入って、私の方が両親を両肩に背負って、もう潰されて倒れそう」と言い、神様にも、「私はこの重荷に耐え切れません。どうしてこんな苦しい中を通るのでしょうか」と呟いたこともありました。

父も「文子、いろんな所を回ったけれども、ここを最終地にしてくれ。自分はここで死にたいから」とはつきり言われて、ケアハウスも素晴らしかったけれども、ホスピスは心のケアをしてくれるんですね。父がきついと言えば、

点滴をしてくださる。いらなと言え、やめてくれる。大きな病院であれば院長先生は週一回しか来ないけれども、ここは毎日来てくれて、声を掛けてくれる。看護師さんも患者二人に一人がついて世話をしてくれるので、あの頑固だった父も、かつては俺の人生をお前が勝手に決めるなど叱っていたのですが、その父が、最近「ありがとう」とか、「苦勞さん」とか、「お前は見かけは強そうだけど、芯は弱い所があるから、体に気をつける」とか、言うことが変わってきまして、心のケアをしてくださる所は素晴らしいなあと思うのですね。

ここ数日は調子がよくて、行きましたら、「文子、俺は当分死にそうもない」、この前までは「明日死ぬ」とか「今年一杯で死ぬ」「きつい、きつい」と言っていた父が、元気が与えられて、もう少し生きそうだと言うんです。

大濠公園教会に栄光病院の事務をしておられる方がいるのですが、その方がそれこそ毎日父の病室に訪ねてくださるのです。何かを喋るといっているのではなくて、ただニコニコして父の様子を見て帰られるだけなんです、そんな素晴らしい方がおられる、父もその方の笑顔を見るだけで、こちら元気を貰えると言うのです。それに看護師さんの応対がとても優しいのです。何よりも祈りの中におらせて

いただけることは、本当に感謝です。

入院の面接に行った時、下稲葉院長先生は、「あなたはどうしたいのですか」と聞かれるので、私はキリスト教中心で、父に魂に平安を与えたいので、是非ここに入れてくださいと言いましたら、じゃあ引き受けましょうと言われました。実はその時は十一人が待っておられたのです。後でその事務の人に聞きましたら、かなり無理をされたようですとの事。それも神様のお恵みだったと思います。

母も亀山の老人ホームに入りたくて申し込んだのですが、順番は申し上げられませんが、主人と来年ぐらいかなと言っていましたら、父の担当医が下稲葉先生の息子さんだったものから、申し込んでいる旨を言いますと、じゃあ聞いて見てあげましょうということになりましたが、何とその日の四時に、お部屋が空きましたからどうぞと連絡があったのです。早速部屋を見せていただき、面接もあつて、母がちゃんと答えられるかなと心配しましたが、神様の憐れみで娘として最善のことをさせていたのだなと思うのです。

この半年間振り返って、良くあの中を通過して来たなと思えますが、御言に支えられて、呟く者を神様が憐れんでくださって、力を与えていただいたと思うのです。私の生

涯を振り返った時、この五九歳の時が一番試練の時だったと思うのですが、主人に言わせると、一番恵みの時だった、文子は「恵まれた女」だったねと言います。

いろんな事がありました。施設に入れること一つを取りましても、人間の力ではどうしようもなくって、ただただ神様に祈るよりほかないわけです。神様は耐えられない試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に逃れるべき道を備えてくださって、通り抜けて来られたことは感謝です。私の力になつたし、神様は今も生きておられることを手ざわるように見せていただきました。

「わたしにきて聞け」と仰る神様の許に行つて、私はどうしたらいいでしょうか、力を与えてくださいって、呼び求める時に、神様が私をおぶるようになって導いてくださる。そんな恵みを味わわせていただきました。

### 飯田美紀子姉

私は十二月十一日に誕生日が来て、六一歳になるのですが、この一年を振り返って、あつという間もなく過ぎてきた思いがします。

昨年の今頃だったでしょうか、下の娘から「結婚したい人がいるので、会ってくれ」と言われて、それからあれよあれよと言ううちに、三月三日の結婚式までバタバタして、

今考えたら何をしたか分からないくらい早い時間で結婚させていただきましたが、先生や皆さんの祈りに支えられて、一つひとつが整えられて、結婚までに至ったことを、心から感謝しています。

結婚に当たっては、自分は教会へ行っていること、そして家庭でも職場でもまず神様を第一にし、礼拝を守ることが大事なので、その事が相手の人に受け入れられなければ、それは神様の御心ではないと言うと、その事ははっきりしているよと言うので、それではこれから折って行こうねという事から始まりました。相手の方は神様を知らない人なので、挨拶に来られた時も、婚約も神様の前にするということを申し上げると、是非そうさせてくださいということ、喜んで理解してくださいました。そういう事で、皆さんの協力も戴いて、無事結婚させていただきました。

その一つひとつを終わって考えて見ますと、結婚式の前日もすごい寒い日で、明日はどうなるのだろうと思つていたら、当日は素晴らしい天気、次の日の日曜日の礼拝に出た後、娘がインフルエンザに罹り、高熱を出してしまいました。次の月曜日から勤めに行かなければならないのに、どうなるかと思つてましたら、神様は素晴らしい事をしてくださって、自分の担当クラスにインフルエンザが蔓延し

て休校になり、「飯田さん、ゆっくり休んでください」という事になったのです。

こうして今日に至ったのですが、その間、娘よりも私の方が、祈っていないながら大丈夫だろうかと心配していたのですが、後で示されたことは、「人は心に自分の道を考え計る、しかし、その歩みを導く者は主である」という御言で、全て神様の御手のうちに導かれることを教えられました。

子供の事もそうですが、主人の事も教会の事を話しても、なかなか導きがありませんけれど、これも神様のご計画の中にあつて、何時どのように導いてくださるか分かりませんが、「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す」とありますように、私自身が神様のご計画が分かる信仰でありたいなと思つています。

また母の白内障の手術も無事終わつて、術後も順調に回復していることを感謝します。

**深町郁子姉** 私は何も出来なくて、毎日台所を這いずり回っているのですが、それが本当に幸せでしてね、祈りながらこれも神様がなさってくださいと思っているのだと思つてやつております。

この度、目の手術をしまして、五、六日回復するまでは

台所に立つては駄目だと言われ、神様が私に休養を与えてくださったのだと思ひました。娘が来てくれた時はよいのですが、主人がやってくれる時は、何をするにもモタモタしましてね、横で見たら、イライラすることもあったのですが、その時神様から示されたことは、今まで自分は幸せ者だという思いの中で、自分の思いだけでやっていたなあということでした。主人のやることにイライラしたり、口を出したりしていたと思うのです。

それで悔い改めまして、これからは絶対口を出さまいと思つておりましたら、苦にならない、イライラしないんですね。熱いものを冷たくして出したり、冷たいものを熱くして出されたりするのですが、楽しくて笑つて過ごされるのです。

ですから、目の手術を通して、私の主人に対する気持とか、自分の自我と言いますか、自分勝手なことをする事を示してくださいまして、教えられました。

あと片方の手術がありますが、神様は今度何を教えてくださいますか、楽しみにしております。

**園田幸子姉** 今日、一年の感謝会があるということで、何が感謝かを考えますと、まずこの感謝会に出させていただいたことが感謝です。出席したいと願つても、出られない方

もおられると思います。感謝会に出て、皆さんのお証しを聞いて、神様を賛美できることは大きな感謝です。

それから、「上を見れば切りがない」とありますが、神様は「わが恵み、汝に足れり」と言われます。信仰のことについても、健康のことについても、経済的なことについても、信仰はいくらあってもいいですが、健康や経済的なものは与えられたものを感謝して受けられるということは、神様の恵みですよ。〔「そうです」と和義先生）

信仰については、今私は最高ではないかと思っています。神様は最高の助け手を与えてくださいます、教会に来るについても、正野さんにいつも乗せていただいて助かっておりますし、車の中でいろいろな話の中で教えられておりまして、神様の恵みで信仰を高めてくださっているのだなあと思っております。

それから健康のことですが、今年は喜寿で皆様に祝福していただいて、感謝です。やはり健康に恵まれていますので、教会にも来れますし、現在私は孫と二人暮らしなんですけれども、孫が最初のうちは信仰について批判的だったのですが、この頃は少しはキリスト教に理解を持っているのかなあって思うようになりまして、神様はやはり聞いてくださると思っております、感謝しています。

私の母が私のために祈ってくれたお陰で、今こうして信仰を持つことができたのですから、私も一生懸命祈って行けば、孫達も救われると確信しています。

現在孫は、宮田町のトヨタに勤めているのですが、朝出と夜出があつて、朝出の時は二時か三時に起きて朝食と弁当を作るのに、最初は私にできるかなあ、辛いなあと思つていましたが、神様にお祈りをしてきた時、ありがとうございますと感謝し、そして感謝できることを、また感謝するんです。

もう少し上手に感謝できるかと思いましたが、皆様に伝わったかどうか。お祈りください。

**小松南子姉** 皆さんのお証を聞いて、本当に恵まれて、涙が出そうです。嬉しい事にも、悲しい事にもすぐ涙が出て、恥ずかしいのですけれども、毎年感謝会に出た帰りには、いつも今年も本当に幸いな一年だったと感謝するのです。今年も最高に恵まれた一年だったと感謝しています。来年はまたどんな年になるか、楽しみに待ちたいと思います。いつもお祈りいただいて、ありがとうございます。

**正野百合子姉** 先程、園田さんが感謝されていましたが、私達も園田さんと車の中でいろんな話をさせていただいて、あなたがたま「日々、互に励まし合いなさい」とあります

が、園田さんに沢山励まされております。本当に神様の御言を信じて歩んでおられるなあと思つて、感謝しております。

主人が先に感謝しましたけど、今年一番の感謝は、やはり結婚四十周年を迎えたということです。いろんな中を通つて、神様の訓練を受けさせていただきまして、こうして一切を終えて、また二人になって振り返ってみると、神様はあの時、この時、助けてくださったなあと思つて、感謝するのです。その時は苦しくて、早く出たいなあと思つていましたが、後から思うと、その苦しみは消えて、感謝だけが残ります。神様は日々いろんな事を起こして、恵みを忘れないように、神様に目を向けさせてくださいますから、感謝しております。

また、孫の心愛ちゃんの献児式の事も、こちらは早く早くと思つていますが、まだ首がしゃんとしてないからとかで延び延びになっていました。何とか気候のいい内にと思つて祈つておりましたら、神様は祈りに答えてくださつて、無事献児式をさせていただいて感謝でした。

先方では、お宮参りとかはしてないそうで、潔の信仰がいくらか保たれるかなあと思つてますけど、いつ狼が来るかと、親の心配は尽きません。先日の木曜会で、「委ねな

さい」と御言を戴きましたので、委ねて、心配の期間を短くしたいと思つています。

**江島嘉寿子姉** 御言に、「苦しみにあつたことは、わたしに良

い事です。これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました」とありますが、私も私の病気の後に、両親の看護、姉と妹の看護、おまけに犬の看護までしてまいりました。

その間、人間の情に流されると言いますか、祈つては参りましたが、情に流されて、心配したり、どうしてあげようかとか思つたりもしました。そういう私を主が憐れんで、その御用を全うさせていただいたのですけど、肉体的な疲れ、精神的な疲れもあり、礼拝に出させていただけでも、先生のお証が頭の中を流れて行くということもありました。その間、魂の飢えというものがあつたと思ひます。

今、御用を済ませていただいて、肩の荷が下りた形で平安を与えられ、礼拝に出させていただいた時に、御言がそのまま入ってくるように、ドンドンお証しが入ってきます。主が憐れんでくださつて、この御言どおりに苦しみの中を通らせていただいたことによつて、今大きな恵みを戴けるのだと思うのです。

私も歳を重ねまして、私自身が天国を目指さなければな

らない時になっており、この時にしっかりと信仰に立たせていただいで、もしもの時期が来た時に、主を賛美して天国を迎えさせていただきたいと思ひます。このような思ひを持たせていただいで、一年を終わらせていただくことを感謝してひます。

**秦タネノ姉** 私は物忘れの毎日を過ごしてひます。物忘れが激しくて、今日もこれを忘れた、今日もまた忘れたという連続で、それで毎日忘れないように日記をつけてひますが、とにかく物忘れの一年だったと感謝してひます。

この歳になるまで、今日で終わりだ、今日で終わりだという思ひで、今日一日を感謝して終わろうと思ひながら過ごすことが、とても嬉しく思ひます。「主を喜ぶことはあなたがたの力です」とあります、そのように神様の御言の上に立つて、たとえどんな不幸が起つても、あるいは見えるものが変わつても、これは主のなさることである、また私が失敗しても、これが私の正体であると、神様に感謝することが出来るのです。

面白いことに、毎日毎日が失敗だらけです。でも後悔することはありません。ああ、神様がこの事をさせてくださった、今度は何が起るのだらうと、楽しみにしてひます。失敗と言うより、楽しみですね。こうして神様が楽しませ

てくださる毎日毎日ですが、御言によつて支えられているのだということが分かります。ですから、家拝から始まつて、夕べの感謝に至るまで、「わたしはあなたの神、主である」、「わたしはあなたと共にいる」と仰つてくださる神様に目を留めて行く時、感謝が湧いてきます。神様は「わが勝利の右の手をもつて、あなたを支える」と仰つてくださいますから、失敗しても良きにしてくださいますから、本当に楽しい毎日を過ごさせていただいでひます。

**中村栄之助兄** 昨年の車の事故で、今年の七月まで無事故・無違反だったら、罰則は取られないということ、それまでは一生懸命頑張りました。ところが八月になつてすぐ、光恵を送つて行く途中、スピードオーバーでお巡りさんから注意を受けました。ハンドルを握る時は、お巡りさんから注意されないようにとお祈りするんですけど、その時は失敗しました。時速八十キロ出ているのに気づいて、すぐバックミラーを見ると、後ろで警察の赤ランプが見えたのです。サツとスピードを緩めたのですが、結局六八キロで罰金を払つて、感謝しました。

それから、孫の運動会の動画が入つてひるといふことで、息子の武弘からDVDが送つてきまして、それを見ようと操作したのですが、画面が出てこないのです。それで金生

先生の所に持って来て、見てもらったんです。そうしたら、必要な処理が成されていないから、送り返しなさいということで、送り返したところ、二、三日前にそれが届いて見たところ、ちゃんと写っていました。

それで、息子にこれを見せても良いかと尋ねたついでに、お前は教会に行っているかと聞いたら、行っていないと言う。孫に聞くと、教会がどこにあるか、教会が何なのかも知らないということです。これではいかんと、息子に来年は小学校に行くのだから、それまでにこちらに来て幼児祝福式を受けさせなさい、旅費は出してやると言ったところ、考えておくとの事でした。これが受けられるように祈っています。

**中村光恵姉** 今の事を補足しますと、とにかく武弘に言うのに命令的なのです。親だからいいとは言え、やはり颯太の責任者は武弘夫婦なんだから、それほど思うのだったら、私達は祈るよりほかにない、陰の力は祈ることですよ、と言ったのです。そしたら、「うん、いいとこ気が付いた」って言ってましたが。

その後、主人がいけない時に、武弘に電話したのです。「あなたは私達の願いを分かっているでしょ」。「うん、分かっているけどがねえ」という返事。「『けどがねえ』が私達の

祈りの課題だけど、お父さんも体が弱ってきているから、急ぐのよ。神様の御手の内だけど、まあ考えといて」と言うのと、「うん、考えとく」ということでした。私もそこで説教しました。そうしたら最後に、「ありがとう」という言葉が出たのです。それで分かってくれたのだなあ、でも仕上げは神様だから、お委ねしようって思わせていただきました。

主人が、「今市の子は幼児祝福式を受けたか」と言うので、「上の子は榎本先生から、下の二人は一麦教会で受けました」と言うと、「それじゃ、受けてないのは中村の子だけじゃないか。何でか」と言うわけです。これは祈るほかない、私達が願う以上に願っておられるのは神様ご自身だから、続けて祈って行きましょうと決心しました。

「我とわが家はエホバに仕え奉らん」というのが、結婚以来の私の祈りだったのです。だけれど、仕上げは神様で、祝福から祝福の人生を送らせていただきました。明日でちょうど結婚三五周年になります。今朝娘から電話で、「お母さん、明日が記念日だね」と言うから、「あなた、覚えてたの。ありがとう」という会話をしましたが、子供達が私達二人を慮ってくれていることを感謝しました。まだ祈りの内に加えられているという報告はないけれども、気にか



けてくれているという状態です。

先日、初めて武弘一家が来てくれましたが、日曜日の夜来るものですから、礼拝に出ないように作戦練って来たねと言ったら、ニヤツと笑っていました。でも、全てに時がある、主の祝福なくしては、何もできないことを知ってもらって、主を恐れる家庭になって欲しいと、切に願っています。

**上田武士兄** 今年の正月から胸焼けが激しく、一月頃は食べすぎかなあと思っていました。二月三月になっても変わらないので、病院にかかりました。そしてあらゆる検査をしてもらった結果、特に悪い所はない、胸焼けがひどければ薬を上げましょうと、漢方薬をくれました。しかし、全然症状は改善されません。

私がかかったのは新日鉄病院で、私の若い時からの病歴が保管されていますので、主治医もそれを見たわけですが、原因が分かりません。で、おかしい、おかしいと言います。

私の方は、四月、五月になって寝ていても胸焼けで苦しむようになりました。それで、これはいかんと思つて、九州年金病院に変わったのです。そこでは検査の結果、心筋梗塞という診断でした。それで手術の必要があるが、今は切開しなくてできる方法があることを教えられ、どうする

かと聞かれたので、するもしないも、この苦しきから解放されたいとの思いから、手術をお願いしました。

それで病院では、手術までに発作が起きた時のために、それを抑えるニトロという薬をくれました。副作用はないとのことでした。これを飲むと、二分ぐらいすると、スーと収まるのです。これはいい薬を貰ったと思いました。

この手術では三泊四日で退院できるとの事です。それを聞いて、嬉しくてたまりませんでした。自分としては大病と思っていましたから。

手術の日、手術室に運ばれる時、私は「天のお父様、天のお父様」と、ブツブツ祈っておりました。手術は三十分くらいで終わるといので、喜んでいましたが、実際は二時間以上かかりました。麻酔は全身麻酔ではなく、執刀医と会話しながらの手術です。血管に管を通すので、動く血管が破れるということ、ベッドに縛り付けられています。手術中、私はこれで苦しみから解放され、家に帰れると思うと、嬉しくて涙が出てきました。でも手足は拘束されているので、涙を拭くこともできませんでした。

私はこの信仰に入ってからまだ五年で、難しいことも分らず、信仰の薄い者です。ただ天のお父様と祈るだけです。こうして無事手術は終わり、四日目には家に帰ることがで

きました。

私は以前、中国で骨折をして早く帰ることを願って祈り、帰ってから新日鉄病院で三ヶ月間入院してリハビリをしまして、いろいろ苦労したことを思い出しますが、私は一ヶ月以上入院しなければならぬ病気を大病と思っていましたので、心臓の病気でたった四日で家に帰れるとは、神様の恵みだと感謝しました。

しかし、一回目の手術で完治したのではなく、三カ月後に再検査をし、その結果で判定するとの事でした。その時の検査は、一回目と同じようにエコーとか心臓のX線写真とかやりました、やはり血管の狭い所があるので、広げる手術をしなければならぬ、最初の手術では金具が一つとバルーン二個で血管を広げる。つまり、金具が三つ入っているわけです。

二回目の手術の時は、前もやりましたから恐ろしくないという気持ちでしたが、実際に手術室に入る前はやはり恐れが起きました。でも、手術用のベッドに寝かされた以上、自分ではどうしようもなく、天のお父様に任せるほかないと思えました。天のお父様は私の祈りを聞いてくださって、今こうしておられることを感謝しています。

### 上田喜美代姉

神様が主人の心臓手術をこのように導いてくださったことは、神様の憐れみでした。それにもまして大きな恵みは、狭心症を通して、主人に禁煙の力が与えられたことです。過去何回か試みましたが、失敗していました。祈って禁煙しましたところ、力が与えられて成功させてくださいました。その六カ月後に、肺のレントゲンを撮ったところが、自分ののではないのではないかと思うほど綺麗になっっていたそうです。

そして今度の狭心症では、心臓の一部は動脈硬化を起こして、真つ黒になつて手の施しようもない状態でした。しかしそれでも、神様の守りですっかり癒してくださいました。皆様の祈りで、またメールの友達が祈りの輪となつて、支えてくださいました。本当に陰の祈りがどれほど大きな力であるかを体験し、感謝な時でした。このような大手術の時も、祈る力を与えてくださいました。この事を思う時、「あなたがたの切り出された岩と、掘り出された穴とを思いみよ」という御言が与えられ、心に沁みました。

また、一週間前はホセア書三章を読んで、ホセアが姦淫で汚れた女を娶れと神様から言われて、自分の財産をはたいて娶って、真実を尽くしたことが記されていました、それにもましてイエス様は、私のような汚れた者を救うた

めに血を流し、肉を裂いてくださいました。この事を示されました時に、心から神様に感謝を捧げました。ありがとうございます。感謝いたします。

**筑山文彦兄** 何かから感謝してよいか分かりませんが、今年満八七歳になるまで、様々な中を通ってきましたが、まず何よりも神様のものとされたことが感謝です。主が「あなたは私のものだ」と宣言してくださいましたから、有難うございます。

それと、数え上げると切がありませんが、家にいます孫が何をして、「ありがとうございます」と感謝の言葉が出てきます。私の方が教えられることですから、いつでも神様に「ありがとうございます」と感謝できるようになりたいと思っております。

感謝したいことは沢山ありますが、今年もあちこち肩や腰の痛い所を支えていただいて、それがあったからこそ、柔らかい心にしていただいて、歩ませていただいております。すことを感謝します。

新しい一年も、希望を持って歩ませていただきたいと思います。ありがとうございます。

**岩隈多賀子姉** 今年の標語のうち、一番右端にある「あなたはわたしのほかに、なにもものをも神としてはならない」とい

う御言ですが、私はイエス様を信じてから、他の神様なんか拝む気は全くないし、この神様以外のものは神ではないことがはっきりしていたので、それは卒業したと思っていました。ところが今年、己を神とすることを、懇々と教えていただきました。まだまだ己を神としている者ですけれども、アツ、自分を神としている、御免なさい、イエス様の十字架によって清めてくださいという、祈りの積み重ねのような一年でした。

己を神とせず、神を主とすることが全ての元であるというところが、はっきり分かりまして、と言うのは、神様を主として自分が低くなると、全ての事が感謝ですし、全ての事が良いことになり、平安がある、喜びがある。私はハア！と思ひまして、七七歳のお祝い以上の神様からの贈り物を戴きました。

勿論、すぐに己を神とする者ですけれども、そういう者を、そのために十字架が立てられていることがはっきりしましたし、自然に感謝が出ますし、そこに立ち返ると平安が来るのです。その事を、実験体得させていただいたことが感謝です。さらに新しい年に向って、神様がどんな御言を与えてくださるか、イエス様の御性質に与かるまでは止むことなく働いてくださるとありますから、そこに目を置

いて、希望に燃えて歩ませていただきたいと思います。

**林由記子姉** 皆さんのお証を聞いて、神様のお取り扱いは一  
人ひとり違うということを、教えられています。私も負  
けないぐらいにお恵みを戴きました。

今年も三つの御言をもって送り出していただきました。  
「わたしのほかに、なにものを神としてはならない」と教  
えられながら、いつの間にか自分の考えや思いに立って  
いました。真ん中の御言「わたしたちは主を知ろう、せつに  
主を知ること求めよう」、神様ご自身が知らせてくださ  
いました。

去年お証しましたように、私は半年ごとに病院で検査  
を受けておりますが、何かないと主を求めない者です。そ  
ういう者を神様は懇ろに懇ろに、一足一足を教え導き、ま  
た御集會に近づけさせ、信仰の軌道修正をさせていただ  
いて、今こうして神様の前に静まる時が沢山与えられている  
ことが、私の一番の至福の時でございます。

毎日が日曜日と言うわけではありませんが、朝早く起き  
て、まず静まる時を持ちますと、やはり早く起きようとい  
う気持ちになりまして、その時が嬉しいものですから、主を  
賛美し、その所で深く深く主から教えられるのです。

今年、私を常に導いていただいた御言は、「主のいつくし

みは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。  
これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい」というこ  
とで、「一日の苦勞は一日にて足れり」、本当に一日一日を、  
今日も主におすがりしてまいります、お導きくださいとお  
祈りしてまいりますと、靈感賦にありますように、「一足、  
一足、エスと共に、日々に、日々に、我は歩まん」と、本  
当に「一日の苦勞は、その日一日だけで十分である」、夜に  
は感謝をもって眠らせていただきます。

また、この歳になつて分かることですが、若い時には気  
づかなかつた神様の深い御愛とイエス様の十字架の贖い  
というものが、はつきりと私達のものとして迫つてまいり  
ます。今こうして恵まれた所におらせていただいて、外な  
る事がいろいろありますけれども、内なるものが日ごとに  
御言によつて強められていることは、本当に感謝です。今  
日の日曜学校の御言が「この言に命があつた」でしたが、神  
様の御言におすがりする、それだけで「力から力」を与えて  
いただいで、感謝をもって一日を送ることができるよう  
していただきました。

聖書通読表でダニエル書を読ませていただいた時に、「し  
かし、終りまであなたの道を行きなさい。あなたは休みに  
入り、定められた日の終りに立つて、あなたの分を受ける

でしよう」、「この御言でもってすぐ励まされました。そしていよいよ神様にお従いしようと思ひまして、ここで新しくしていただきました。

受胎告知を受けたマリヤが「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます。この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。…力ある方が私に大きな事をしてくださったからです」。本当にそのとおりです。陰にあつて先生方始め皆さん方が祈つてくださったことを感謝します。

**筑山寿々子姉** 聖書通読をさせていただいて一年になります。が、毎日楽しみにしています。右から左へとすぐ忘れるんですが、主人と共に祈らせていただいております。

「孫達と一緒に生活していると、楽しいね」と言うものから、私が「二人だけだったらどうなの」と聞くと、「お通夜みたいだね」と言うんです。本当に孫達と楽しい毎日をごさせていただいております。主人が言ったように、何でもチョットしてあげると、「ありがとう」とつていう言葉が出るのです。本当に感謝だと思つていきます。

主人のお祈りの中に、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい」という御言が毎日のように出てきます。今年も本当に感謝の一年で

した。

**河本信生兄** 朝起きて目が見え、耳が聞こえ、口でしゃべり、食べることができる、一つひとつが大変な感謝な事であり、何か一つでも具合が悪いと、とても不自由ですから、何事もなく過ごせることがどんなに感謝であるかと思ひます。

もう一年になりますが、私に取りましては仰天動地の出来事がありました。マリヤが御使から受胎告知を受けましたが、その時「バクシヤ デスピ」、「そんな事があつてたまるもんですか」ということを言つたのですが、私もそれと同じような事、マリヤさんの場合は人類を救う幸いなことでありましたが、私にとつては大変な憎しみと怒りをもたらすものでありまして、未だに続いているのです。

今朝の新聞の連載小説を見ますと、自分をおとしめようとする奴を捕まえて、憎しみのあまり殺そうとします。相手は恐怖のあまり失禁して腰を抜かし、這つて逃げようとする。それを追っかけていって、蹴飛ばして切り捨てるという内容です。

私に対して害悪をもたらせた人間がおりますから、そういう気持が一杯で、そいつを切ろうと思ひましたね。命を取つてしまえば、自分は八つ裂きにされても構わない、そ

んな修羅な気持でした。憎しみの塊ですよ。

その後、体に带状疱疹ができました。十一月の始め頃、娘夫婦が来まして、自分では気が付かなかったのですが、お父さん顔に傷ができましたね、あんな事があつたからねと言うのです。自分は別に気にしてないよと言つたのですが、やはり残っていたのでしよう。そういう事があつて、その人の人生をズタズタにしてやりたい、そんな怒りで燃えていました。

たまたま先週、和義先生の説教プリントを見てまして、コリント人への第二の手紙六章四節に、「かえつて、あらゆる場合に、神の僕として、自分を人々にあらわしている。すなわち、極度の忍苦にも、患難にも、危機にも、行き詰まりにも」とありました。和義先生は前半の方を中心にお話されていましたが、私は後半の「極度の忍苦にも、患難にも……」の箇所が非常にですね、神様はこの言葉を示してくださいと思いました。

また今朝の日々の聖言のメールで、「まちがつてはいけない、神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを、刈り取るようになる」という約束をなさいました。その約束を信じて、心安らかに過ごさせていたきたいと思つています。

和義先生の「日々の聖言」は、多くの人に救いと喜びと信仰を与えていると思いますが、毎日大変だろうと思ひます。よくこれだけの事が言えるもんだ、心探られ、勇気付けられますし、感謝しています。

**河本米子姉** 「我、よきゆずり(嗣業)を得たるかな」、こんな素晴らしい生涯に入れていただいたことは、何と幸いなことであろうかと感謝しています。

今年一年、事があるたびに、大きい事、小さい事、みんなその中を通していただいて、教えられました。どんな事があつても、全ては神様の御手の内、そこに目が止まります時、不思議なように平安が与えられて、「イスラエルの賛美の上に座し給う主」と、御霊の声を戴きます。そうすると、主に感謝せよから始まつて、感謝のできないことは一つもないという信仰まで導いてくださいます。

御集会の際に、心に沁みる命の御言が与えられて、力が与えられ、慰められ、導いてくださる。口では言い表せない暖かいものを戴き、勇気が与えられて、一足一足歩ませていただきました。この感謝をもって、新しい一年も待ち望んで行きたいと思つています。

**首藤正兄** 歳を取るといふことは、有形無形のを失うことだと思ひます。自分の歯を失つたり、最近は何んと言

葉、記憶を失うのです。家内と十年前に旅行に行った記憶が、家内は覚えていますが、私はコロッと忘れているんですね。私は自分のことをセミ認知症に罹っていると、半分冗談、半分本気で言うのですが、特に人の名前とか、固有名詞が出てきませんね。それで私はそういう事が起こるたびに、こういう状態ですとイエス様にお祈りします。早く言えば、感謝も、失敗も、そういう失うものも、イエス様にお返しすると言いますか、イエス様が私を贖ってください。だから、私の持ち主であられるイエス様のものとして、私の全てを委ねて行く時、全てに感謝と平安が帰って来ます。

それを総括しますと、私は散歩が好きでよくするのですが、口の上ってくる讚美歌は、私の愛歌「主よ、御許に近づかん」(三二〇番)です。英語で言えば「near ニアー(近くに)」、もつと近く、主よ、もつと近くという意味で、これをよく歌うのですが、この一年で主に一步、値切っても半歩近づいたという実感があるわけです。この実感を来年もまた、さらに信仰を持って主に近づけさせていただきたい、そういう思いであります。

(讚美歌五三三五番を賛美して終了)



# 福岡大濠公園教会年表

## 一九九九年(平成十一年)～二〇〇七年(平成十九年)

一九九九年(平成十一年)

一月一～三日 新年聖会

○ 見よ、わたしはすべてのものを新たにす。

(黙示録二一・五)

○ 栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。

(第二コリント三・十八)

○ わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに

答える。(エレミヤ三三・三)

一月十七日 成人祝福式(上野孝裕兄)

三月二日 洗礼式(上野孝裕兄、正野敬士兄)

四月 四日 イースター礼拝

二五日 江口亮子姉転入会(日本イエス・キリスト教団

長崎めぐみ教会から)

五月十六日 洗礼式(上野正裕兄)

八月十三日 教会学校「一日お楽しみ会」

十五日 献児式(澤野頌君)

九月十二日 結婚式(山中良美姉とアントニオ・アメンドラ兄)

十六日 谷口泰雄兄(谷口ハナ姉ご主人) 召天

十九日 洗礼式(久保田忍兄)

十月 十日 教会の大改装開始(会堂の拡張、エレベータ

ー設置、玄関回り、外壁塗装、屋根裏納戸設

置、内装改装、浴室移設他)

十一月四日 大谷冬子姉召天

十二月 「ぶどうの木」二七号発行

十九日 クリスマス礼拝・祝会

二四日 クリスマス燭火夕拝

二六日 八幡前田教会青年会と合同青年会

## 二〇〇〇年(平成十二年)

一月一～三日 新年聖会

○ 信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。

(ヘブル十一・六)

○ 子たちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。

(第一ヨハネ二・二八)

○ 主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、

いつくしみと、まこととの豊かなる神、…。

(出エジプト三四・六)



一月 聖書通読を始める。

二月二八日 岩谷モモヨ姉召天

三月十四日 平尾靈園教会墓地改築

二六日 洗礼式（正野栄子姉）

二八日 平野正雄兄召天

四月十六日 OMF宣教会宣教師、菅家庄一郎師来訪

二三日 イースター礼拝

二三日 平尾靈園新納骨堂献堂式、「栄光陵」と命名

三十日 教会改装工事完成

五月二一日 教会改装、納骨堂献堂の感謝礼拝

（講師名古屋一麦教会牧師 松原向師）

七月 九日 平岡恵也兄召天

二八日 松崎ひろ子姉召天

十月 九日 結婚式（金生一郎師と金井栄子姉）

（八幡前田教会にて）

二九日 洗礼式（隈上麻衣姉）

十一月十九日 鶴原正蔵兄、千恵子姉転入会

（日本キリスト教団警固教会から）

十二月二四日 クリスマス礼拝・祝会・燭火夕拝

二〇〇一年（平成十三年）

一月一〜三日 新年聖会

〇 わたしは主である、わたしのほかに神はない。

（イザヤ四五・一八）

〇 わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。そ

れゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた。

（エレミヤ三一・三）

〇 主を待ち望め、強く、かつ雄々しくあれ。

（詩篇二七・十四）

主を待ち望め。

一月十三日 結婚式（上野孝裕兄と江口智子姉）

十四日 成人祝福式（正野敬士兄、隈上麻衣姉）

二月二五日 緒方とみ子姉転入会

（基督伝道隊戸畑教会から）

四月十五日 イースター礼拝

十五日 「ぶどうの木」二八号発行

七月十五日 洗礼式（平野馨兄、山本ハル子姉）

八月十二日 教会学校一日お楽しみ会

二十日 洗礼式（病床にて、吉永知代姉）

二四日 吉永知代姉召天

十一月二五日 献児式（上野雄貴君）

十二月二三日 クリスマス礼拝・祝会

二四日 クリスマス燭火夕拝

二〇〇二年(平成十四年)

一月一〜三日 新年聖会

○ 今は主を求むべき時である。(ホセア十・十二)

○ 御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよ

めるのである。

(第一ヨハネ一・七)

○ 御霊によつて歩きなさい。

(ガラテヤ五・十六)

一月二十日 成人祝福式(限上早歌姉)

二月二八日 尾下かおる姉召天

三月 三日 郡 優吏佳姉転出会(三鷹バプテスト教会)

十六日 結婚式(中野勝広兄と矢儀暢子姉)

二二日 花田実兄召天

三二日 イースター礼拝

三二日 竹添智美姉転入会

(日本キリスト教団玉川教会から)

四月十一日 榎本利三郎前牧師召天

六月 「ぶどうの木」二九号発行

八月十四日 教会学校一日お楽しみ会

九月二九日 洗礼式(花田敦子姉、正野聖美姉)

十二月二二日 クリスマス礼拝・祝会

二四日 クリスマス燭火夕拝

二〇〇三年(平成十五年)

一月一〜三日 新年聖会

○ わたしの愛のうちにいなさい。(ヨハネ十五・九)

○ 神は愛である。

(第一ヨハネ四・八)

○ わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によつて歩いているのである。(第二コリント五・七)

一月 二日 榎本百合子姉召天

三月二二日 榎本利三郎・百合子両師記念会

(八幡前田教会にて)

二二日 小松秀夫兄(小松姉のご主人)召天

加賀典子姉召天

四月二十日 イースター礼拝

六月 一日 濱田満江姉召天

八月 三日 献児式(澤野可奈ちゃん)

十四日 教会学校一日お楽しみ会

九月二八日 「日々の聖言」プリント配布始まる

十月十八日 結婚式(上野正裕兄と糸岐友美姉)

十九日 献児式(上野愛希ちゃん)

十一月 「ぶどうの木」三十号発行

三十日 献児式(中野綾音ちゃん)

十二月二一日 クリスマス礼拝・祝会

二四日 クリスマス燭火夕拝

二〇〇四年(平成十六年)

一月一〜三日 新年聖会

○ 見よ、わたしはすべてのものを新たにす。

(黙示録二一・五)

○ あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならな

い、おののいてはならない。(ヨシユア一・九)

○ 見よ、わたしは主である、すべて命ある者の神である。

わたしにできない事があるうか。

(エレミヤ三二・二六)

一月二九日 花田照二朗兄召天

二月 六日 津留崎浩行兄召天

四月十一日 イースター礼拝

十八日 洗礼式(隈上望都姉)

六月 六日 OMF宣教会宣教師、菅家庄一郎師来訪

十一日 田中重久兄召天

七月十七日 猪城なみ姉召天

二七日 榎本和義牧師前立腺がん手術

十月 九日 結婚式(花田仁兄と宮城奈都子姉)

二四日 説教プリントを定期に発行

十一月二日 松崎まり子姉召天

十二月十九日 クリスマス礼拝・祝会

二四日 クリスマス燭火夕拝

二〇〇五年(平成十七年)

一月一〜三日 新年聖会

○ あなたはわたしのほかに、なにもものをも神としてはな

らない。(出エジプト二十・三)

○ わたしに立ち返れ、わたしはあなたがあがなったから。

(イザヤ四四・二二)

○ あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべで

ある。(イザヤ四三・一〇)

一月十三日 内田喜代姉召天

三十日 本部琢巳兄転入会

(日本神の教会連盟立川神の教会から)

三月二四日 ケネディ・寿子(旧姓折瀧)姉召天

二七日 イースター礼拝

五月 四日 結婚式(西山公治兄(八幡前田教会)と時松喜

美子姉)

六月十四日 上野米子姉召天

八月十四日 献児式(上野光翼君)

十六日 教会学校一日お楽しみ会

二五日 献児式(上野初君)

九月二三日 結婚式(貞頼子姉と内藤昭雄兄(名古屋日進ベ

タニヤ教会員)(於名古屋)

二五日 「ぶどうの木」三一号発行

十一月九日 永島カツコ姉召天

十三日 洗礼式(矢野康子姉)

二十日 青年会と若家族をまとめて「若枝会」発足

十二月二四日 クリスマス燭火夕拝

二五日 クリスマス礼拝・祝会

十二月 松井富美子姉召天

○ まず神の国と神の義とを求めなさい。

(マタイ六・三三)

○ わたしは神である、今より後もわたしは主である。

(イザヤ四三・十三)

○ ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえつ

たイエス・キリストを、いつも思っていないさい。

(第二テモテ二・八)

三月十九日 同盟福音キリスト教会一宮キリスト教会牧師

限上正敏師来訪

四月 九日 イースター礼拝

五月 四日 榎本利三郎牧師・百合子師記念会

(於八幡前田教会)

四月 四日 榎本利三郎・百合子記念誌「汝は我に従え」

発行

六月十一日 「日々の聖言」と「聖書からのメッセージ」(ネ

ット版説教プリント)をインターネットで公開

七月 八日 結婚式(正野栄子姉と前田学兄)

十二月二三日 クリスマス燭火夕拝

二四日 クリスマス礼拝・祝会

二〇〇六年(平成十八年)

一月一〜三日 新年聖会

二〇〇七年（平成十九年）

一月一〜三日 新年聖会

○ わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。  
(第二コリント四・十八)

○ 主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。  
(第一ヨハネ三・十六)

○ 聖霊を受けよ。  
(ヨハネ二十・二二)

二月二五日 「ぶどうの木」三二号発行

四月 八日 イースター礼拝

五月十三日 山本淳子姉転入会  
(日本キリスト教団佐伯教会から)

六月 榎本利三郎牧師説教集「雲の柱、火の柱」

第一巻発行

十日 キリスト伝道隊脇町キリスト教会牧師

岩井従男師ご夫妻来訪

八月十四日 教会学校「一日お楽しみ会」

二六日 献児式（花田結実ちゃん）

十一月二六日 教会の車「エステイマ」購入

十二月十六日 クリスマス礼拝・祝会

二四日 クリスマス燭火夕拝



2008年1月1日 大濠公園教会



2008年1月4日 八幡前田教会



2008年1月4日 八幡前田教会

## 編集後記

◎ 「ぶどうの木」第三三号をお届けします。

約一年ぶりの発行となります。今回も皆さんから恵まれたお証しを投稿くださって、感謝します。

◎ この「ぶどうの木」に「我が思い出」と題して毎回投稿し

てくださった鈴木一幹兄が、昨年十二月に召天なさいました。第一回が一九九三年三月発行の第十九号でした。以来、三二号まで十四回にわたって掲載されました。これは単に、風化しつつある戦争体験と言うに留まらず、あの厳しい中で神が如何に兄を守り導いてくださったかという、貴重な生きた証でした。

残念ながら台湾篇の途中で中止になりましたが、現在、御遺族の方によって、「我が思い出」を中心とした記念誌が作られております。

◎ この事が可能となったのも、兄がこの「ぶどうの木」に投稿し、記録として残してくださったからです。ぜひ皆さんの生きた証を地中に埋没させることなく、記録として残されるよう、それがまた多くの人を励ます記念誌となるのではないかと思います。(S)

発行 二〇〇八年二月

発行者 福岡市中央区鳥飼二―二―二六

基督伝道隊 福岡大濠公園教会  
牧師 榎本和義

発行所 基督伝道隊

八幡前田教会  
福岡大濠公園教会  
戸畑教会

印刷製本 北九州印刷株式会社